

四箇新村線関係埋蔵文化財調査報告

重留村下遺跡

-重留村下遺跡群第1次調査報告-

四箇遺跡群

-四箇遺跡群第26次調査報告-

福岡市埋蔵文化財調査報告書第510集

1997

福岡市教育委員会

四箇新村線関係埋蔵文化財調査報告

しげ とめ むら し

重留村下遺跡

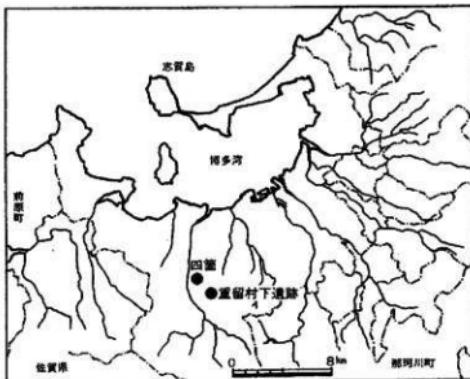
-重留村下遺跡群第1次調査報告-

し か

四箇遺跡群

-四箇遺跡群第26次調査報告-

福岡市埋蔵文化財調査報告書第510集



遺跡名	調査番号	遺跡略号
重留村下遺跡群第1次調査	9403	SGM-1
四箇遺跡群第26次調査	9456	SIK-26

1997

福岡市教育委員会



(1)重留村下遺跡SD003出土 製鉄炉炉壁



(2)SC008出土 水晶片

序

玄界灘に面し古くから大陸との文化交流の玄関口であった福岡市には、豊かな自然と歴史が残されています。の中でも早良平野は大陸との交流の中で古くから栄え、遺跡も多く存在しています。これらを保護し未来へ伝えていくのは行政に課された責務であります。しかし、近年の著しい都市化による市街地の拡大はこの地域にも及ぶようになり、その結果その一部が失われつつあるのもまた事実です。福岡市教育委員会は開発にともなってやむを得ず失われていく遺跡について、事前の発掘調査を行い記録の保存に努めています。

本書は道路建設に伴う早良区の重留村下遺跡と四箇遺跡の発掘調査の成果について報告するものです。これらの調査地点は福岡から佐賀に抜ける国道263号線に面する地域であり、現在開発がもつとも進みつつある地点のひとつです。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また、研究資料として御活用頂ければ幸いに存じます。最後に発掘調査から報告書の刊行に至るまで、多くの方々の御理解と御協力を賜りましたことに対して心から謝意を表する次第であります。

1997年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 町田 英俊

例　　言

□本報告書は早良区西簡新村線の道路改良にともなって1994年4月1日から7月8日にかけて調査を行った重留村下遺跡群第1次調査と1994年12月15日から1995年1月18日まで調査を行った西簡遺跡群第26次調査の発掘調査報告書である。

□本書に収録した発掘調査は福岡市教育委員会の屋山洋が担当した。

□遺構実測図の作成は屋山・辻節子・山田ヤス子が、遺構の写真撮影と遺物の実測は屋山が行った。また、製図は屋山と鷹早津紀が行った。

□本書で用いた方位は磁北で、真北より $6^{\circ} 21'$ 西偏する。

□重留村下遺跡群第1次調査における製鉄関連遺物に関しては穴澤義功・大澤正己両先生から助言を頂いた。

□遺構・遺物番号は各遺跡ごとに通し番号にした。

□本書に関わる図面、写真、遺物など一切の資料は福岡市立埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。

重留村下遺跡群第1次調査

遺跡調査番号	9403	遺跡略号	SGM-1	分布地図番号	重留84-A-6
調査地地番	福岡市早良区重留1丁目510-2、511-3				
開発面積	1250m ²	調査面積	1114m ²	調査原因	道路建設
調査期間	1994年4月1日～7月8日		担当者	屋山洋	

西簡遺跡群第26次調査

遺跡調査番号	9456	遺跡略号	SIK-26	分布地図番号	重留84-A-2
調査地地番	福岡市早良区重留7丁目8-8				
調査対象面積	490m ²	調査面積	75m ²	調査原因	道路建設
調査期間	1994年12月15日～1995年1月18日		担当者	屋山洋	

本文目次

第1章 重留村下遺跡群第1次調査の記録	1
I はじめに	1
1 調査に至る経過	1
2 調査の組織	1
3 遺跡の立地と環境	1
II 調査の記録	4
1 調査の概要	4
2 弥生時代の遺構と遺物	4
1) 土壙	4
2) 溝	7
3 古墳時代の遺構と遺物	7
1) 積穴式住居	7
2) 土壙	20
3) 溝	20
4 占代の遺構と遺物	25
1) 土壙	25
5 中世の遺構と遺物	25
1) 土壙	25
2) 溝	27
6 時期不明の遺構と遺物	27
1) 土壙	27
7 小結	29
第2章 四箇遺跡群第26次調査の記録	30
I はじめに	30
1 調査に至る経過	30
2 調査の組織	30
3 遺跡の立地と環境	30
4 周辺の調査	30
II 調査の記録	32
1 調査の概要	32
2 遺構と遺物	32
3 小結	34

挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図 (1/75000)	2
第2図 重留村下遺跡群調査区位置図(1/5000)	3
第3図 弥生時代遺構・出土遺物実測図 (1/30・1/3)	5
第4図 弥生時代出土遺物実測図 (1/3)	6
第5図 SC007遺構実測図 (1/60)	8
第6図 SC008遺構実測図 (1/60・1/30)	9
第7図 SC008出土遺物実測図(1) (1/3)	10
第8図 SC008出土遺物実測図(2) (1/3・1/2・1/1)	11
第9図 SC015・SC016遺構・出土遺物実測図 (1/60・1/40・1/3)	13
第10図 SC029遺構・出土遺物実測図 (1/60・1/30・1/3・065は1/1)	14
第11図 SC033遺構・出土遺物実測図(1/60・1/30・1/3)	15
第12図 SC034遺構・出土遺物実測図 (1/60・1/30・1/3)	16
第13図 SC037遺構・出土遺物実測図(1/60・1/3)	17

第14図	SC038・SC039遺構・出土遺物実測図 (1/60・1/3)	19
第15図	SK005・030・031・SD003遺構・出土遺物実測図 (1/30・1/3)	21
第16図	SD003出土炉壁実測図(1) (1/3)	22
第17図	SD003出土炉壁実測図(2) (1/3)	23
第18図	SK001・002・013・024遺構実測図 (1/30)	24
第19図	SK006・009・012・017・SD018遺構実測図 (1/30、SK017は1/60)	26
第20図	SK006・009・023・SP0149出土・遺物実測図 (1/3)	27
第21図	SD018出土遺物実測図 (1/3)	28
第22図	SK014・026遺構実測図 (1/30)	29
第23図	四箇遺跡第26次調査区周辺図 (1/1200)	31
第24図	調査区南北壁土層図 (1/60)	33
第25図	調査区全体図 (1/100)	34
第26図	出土遺物 (1/1・1/3)	34
付図	重留村下遺跡群第1次調査遺構配置図 (縮尺1:150)	

図版目次

巻頭図版 (1) 重留村下遺跡SD003出土製鉄炉炉壁 (2) SC008出土水晶片

重留村下遺跡群第1次調査

- 図版 1 1)調査区東側全景 2)調査区中央全景 3)調査区西側全景 4)SK025
- 図版 2 1)SK011 2)SK019 3)SK027 4)SK027・SD028
- 図版 3 1)SC007 2)SC008 3)SC008竈内遺物出土状況 4)SC016・SK023
- 図版 4 1)SC029 2)SC033 3)SC033竈検出状況 4)SC033竈
- 図版 5 1)SC034・SC037 2)SC033・SC034・SC037 3)SC039 4)SC007・SC008
- 図版 6 1)SC015 2)SC038 3)SK031 4)SC034検出状況
- 図版 7 1)SD003 2)SK006 3)SK009 4)SK017
- 図版 8 1)SD018 2)SK012 3)SK020
- 四箇遺跡群第26次調査
- 図版 9 1)調査区全景 2)南側土層
- 図版10 1)黄褐色粘土層 2)土器出土状況

第1章 重留村下遺跡群第1次調査の記録

1はじめに

1 調査に至る経過

1995年に行われたユニバーシアード大会の会場の一つが早良区四箇田団地の南側に建設され、その会場への連絡道路である市道四箇新村線の重留地内道路改良工事に伴う埋蔵文化財事前調査の依頼が1993年(平成5年)11月1日に土木局道路建設第1課から埋蔵文化財課に提出された。申請地は重留村下遺跡群の範囲を含んでいたので、1993年(平成5年)12月17日から民家等の立ち退きにあわせ数回に分けて試掘を行った。重留村下遺跡群周辺における道路の新設・改良部分は700mにわたるが、河川の氾濫等によって遺構を確認できない部分が多かったので、国道263号線に面する部分の1114m²の調査をおこなった。本調査区は重留村下遺跡群の周辺部に当たるが、試掘調査の結果住居跡等を確認したので、本調査を行った。

2 調査の組織

調査委託 土木局道路建設第1課

調査主体 福岡市教育委員会

埋蔵文化財課長 折尾学(前) 荒巻輝勝(現)

埋蔵文化財課第1係長 横山邦継

調査庶務 埋蔵文化財課第1係 入江普男(前) 小森彰(現)

試掘担当 埋蔵文化財課第1係 長家伸

調査担当 埋蔵文化財課第1係 尾山洋

作業員 青木秀雄 菊池賛 小金丸昭二郎 竹崎俊夫 戸沢林 松尾茂 山下文夫

岩見敏子 向部喜久美 川崎ツキエ 柳沢ミ子 萩田シズノ 植宏子

辻節子 徳重コマキ 徳重忠子 徳永千鶴子 中園登美子 西田マキエ

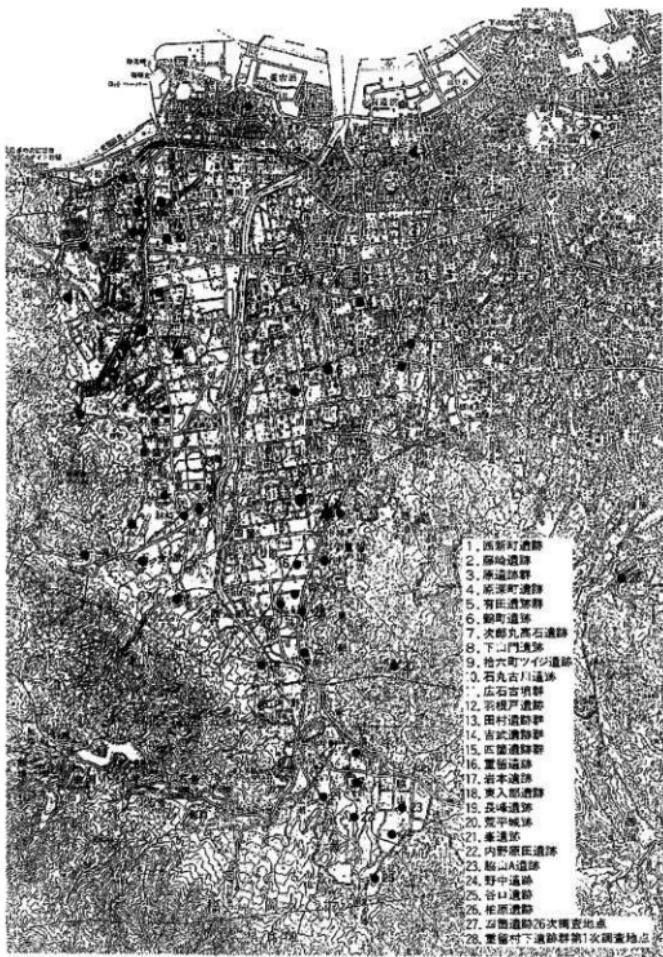
間せつ子 平川英子 平川富美子 平川伸子 平川史子 山尾タマエ

山口タツエ 山田ヤス子

整理作業 神谷玲子 黒早津紀 濱野年代 山口初子

3 遺跡の立地と環境

重留村下遺跡群は早良平野中央部の東端に位置し、油山山塊から西に延びる丘陵の先端部分から一段落ちた台地上に位置する。東側の丘陵部と西側の沖積平野にはさまれ、東西330m、南北710mの範囲にわたる。東側の丘陵部には重留古墳群や古手の須恵器窯である重留古窯の調査が行われている。調査区の西側では金屑川から西側に四箇遺跡群と重留遺跡群が広がっているが、これまで四箇遺跡では26次の調査が行われており、重留遺跡群でも人部の圃場整備に伴う調査で早良平野最南端の前方後円墳である重留坪塚古墳等や繩文後期から中世の集落跡が調査されている。同じ台地上に於ける北東側の浦出遺跡では甕棺墓の調査が行われている。北側は広い沖積平野が広がるが、現代でも条里制の区画がよく残っている。本調査区は重留村下遺跡群の北端に位置する。台地の西端の沖積低地との境界にあたり調査区の西側の脇を金屑川の支流が流れ。本調査区は現状は水田であるが、西に向かって段々と低くなってしまおり金屑川の支流の手前で100cmほど急に落ちている。金屑川による削平と思われ、トレチを入れたところ、下は砂礫層で遺構や遺物は確認できなかった。



第1図 周辺遺跡分布図(1/75000)



第2図 豊留村下遺跡群調査区位置図(1/5000)

II 調査の記録

1 調査の概要

本調査区は道路の新設に伴う調査である。試掘の結果、水田耕作土の直下で遺構が確認されたので、1994年の4月1日から調査を行い、1994年7月8日に終了した。工事に関わる面積は1250m²、調査面積は1114m²である。調査区の東側では耕作土直下の黄白色粘質土上面で遺構を確認した。遺構の残存状況は良好ではない。黄褐色粘質土は西側に向かってながらに傾斜しているため、調査区西側では耕作土との間に暗茶褐色砂混り土の中間層があり、滑石製石鍋の破片や土師焼片など中世の遺物が多く含まれていた。暗茶褐色砂混じり土の上面では遺構は確認できなかった。北東側は30m程で台地の縁になり、北東に緩やかに下っていく。調査区東側で黄白色粘質土にトレンチを入れた結果、黄白色の粘質土と白色の粗砂が交互に堆積しており、台地の落し際は水成堆積によって形成されているのを確認した。この堆積土は160cm程掘り下げたものの、遺構や遺物は確認できなかった。遺構検出面の標高は東側で28.200m、西側で26.960mを測る。東側は削平が著しく、溝とピット状遺構しか確認できなかったが、西側と同じく堅穴式住居が存在したものと思われる。調査区は細長く土の搬出も出来なかつたことや、田植え等との関連で、まず東側半分の調査を行い、その後西端部の調査、最後に残りの中央部の調査を行うなど、調査区を3つに分けて調査を行った。

2 弥生時代の遺構と遺物

1) 土壙

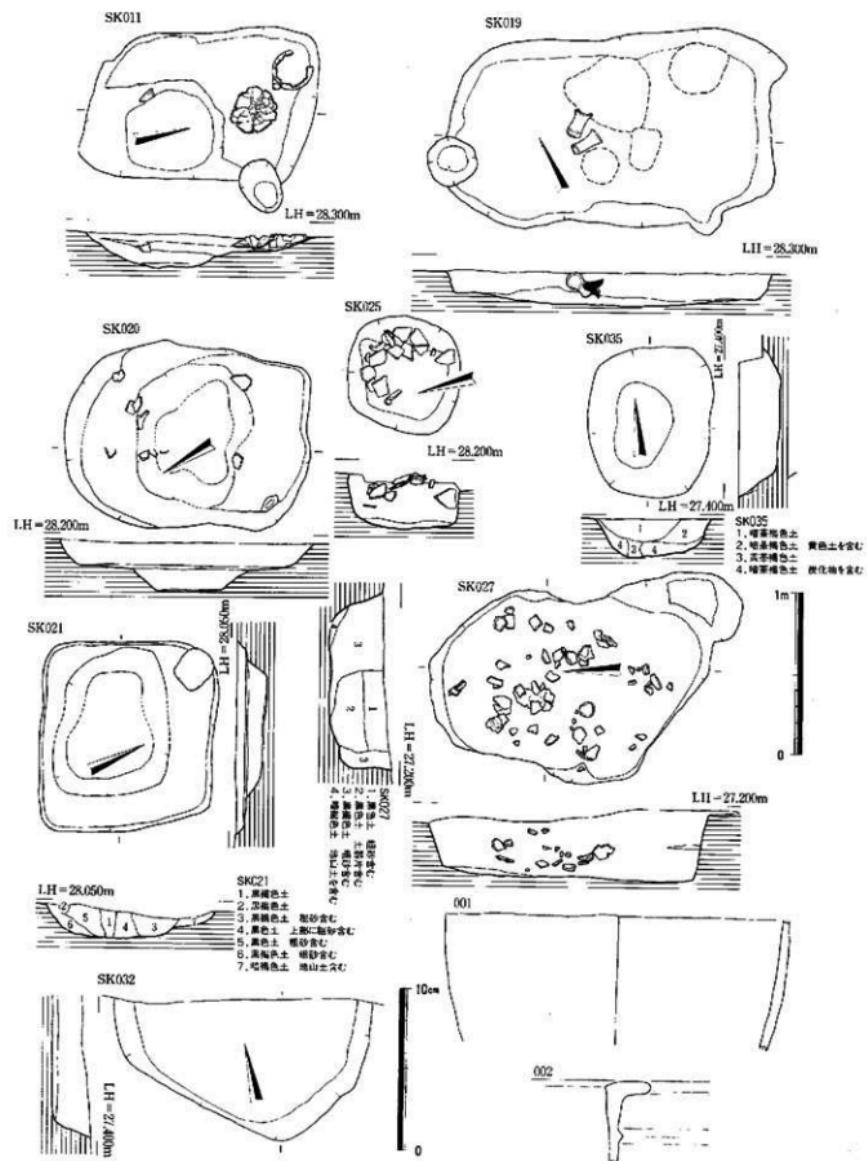
弥生時代の土壙を7基検出した。遺構は調査区全体に分布している。

SK011(第3図)調査区の中央やや東寄りに位置する。平面は南北に長い平行四辺形を呈し、長径137cm、短径95cm、深さ21cmを測る。東南隅が1段低くなっている。中段のテラスの北側部分で横倒しの壺と逆さまに伏せた壺の一部分を検出した。覆土は暗灰褐色土で上層は粗砂、下層は地山ブロックを含む。出土遺物(第3図001・002)。001は壺で口径約20.8cmを測る。風化が著しい。L型口縁と思われるが、口縁を打ち欠き、伏せた状態で出土した。遺構上部の削平に伴い口縁部のみが残存している。002は甕口縁である。L型口縁で口縁から下に3cmに断面三角形の突帯を施している。横倒しで出土した壺は取り上げ時に細片となり、復元は不可能である。

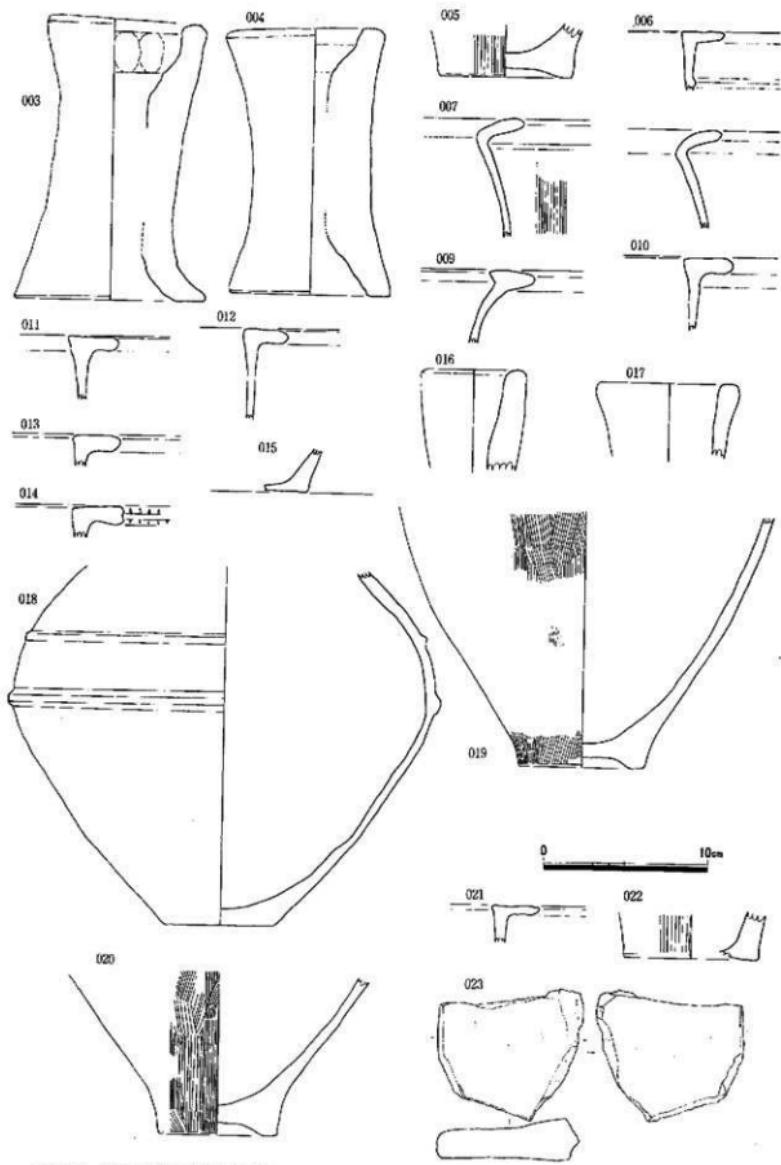
SK019(第3図)調査区の中央に位置する。長径200cm、短径119cm、深さ21cmを測る。平面形は隅丸の長方形を呈し、断面は浅皿状を呈する。覆土は炭化物を含む灰褐色で、上に地山の黄褐色粘質土が被さっている。中央やや西寄りに小型の器台が2個体横倒して出土した。出土遺物(第4図003・004)。003・004は器台である。003は口径9.7cm、器高17.2cmを測る。器壁は肉厚で調整は指オサエによる整形をそのまま残している。004は口径9.7cm、器高16.2cmを測る。これもかなり肉厚である。調整も003と同じく指オサエによる整形のみである。両方とも後世のピットにより一部をけずられている。

SK020(第3図)調査区の中央に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、長径149cm、短径116cm、深さ32cmを測る。床面は南北両側にテラスを持つ。出土遺物は甕の底部、腹部が2~3個体分出土したが、小片で復元できなかった。出土遺物(第4図005)は甕底底部である。底径8.1cmを測る。風化のため内面の調整は不明瞭であるが、外面は継刷毛である。

SK021(第3図)調査区の中央、SC008の北側に位置する。平面形は隅丸の方形を呈し、長径89cm、短径71cm、深さ19cmを測る。断面浅皿状を呈し、覆土は黒褐色土で粗砂を含む。弥生時代中頃の甕口縁と底部が出土した。出土遺物(第4図006)は甕口縁である。口縁はL字型をなし、口縁から3cm下がって断面三角形の突帯を張り付けている。



第3図 新生時代遺構・出土遺物実測図(1/30-1/3)



第4図 弥生時代出土遺物実測図(1/3)

SK025(第3図)調査区の中央北寄りに位置する。径46cmの隅丸方形で、深さ22cmを測る。断面は箱形を呈す。上層から弥生土器がまとまって出土したが熱で表面の剥離が進んでおり、復元は困難である。出土遺物(第4図007・008)。二つとも壺口縁である。口縁部がやや立ち上がり「く」の字形を呈す。口縁は横ナテ、外面は縦刷毛である。

SK027(第3図)調査区の西側に位置する。平面形はいびつな梢円形を呈し、南東側に張り出したテラスをもつ。長径171cm、短径112cm、深さ43cmを測る。断面は箱形で覆土は黒褐色を呈す。底部に薄く粘土が堆積しており、白色砂を多く含む。弥生時代の溝であるSD028に伴い溝から水が流れ込んだと考えられる。遺構全体から弥生時代中頃の壺の破片が出土している。出土遺物(第4図009~020)。009は壺先口縁壺の口縁である。頸部は緩やかに外反し、やや丸みを持つ壺先の口縁に繋がる。010~014は壺の口縁である。いずれも脇部から直角な水平方向の口縁をもつ。014は口縁端に沈線を施し、その後沈線をまたいで刻目を入れている。015は壺の底部である。調整は不明で白色砂を多く含む。016~017は小型器台の口縁である。016は口縁部で器壁1.5cmと肉厚で、調整は指オサエによる整形のみである。017は外面縦刷毛を施す。018は壺である。底径6.7cmを測る。脇部中央に断面台形、その上に断面三角形の突帯が貼り付く。調整は不明である。019~020は壺の底部である。019は底径7.4cmを測る。外面は縦刷毛であるが、2次焼成のため表面は薄く剥離している。020は底径7.3cmを測る。外面は縦刷毛、内面は風化のため不明瞭である。

SK032(第3図)調査区の西側に位置する。SC029に切られて全容は不明であるが、現状で南北に細長い方形を呈し、長径154cm、短径89cm、深さ21cmを測る。東隅にピット状の窪みを持つ。弥生時代中頃の壺の口縁や底部、磁石が出土している。出土遺物(第4図021~023)。021は壺口縁である。内面口縁端に段がみられる。暗褐色で砂を含む。022は壺底部である。底部のたちあがりはわずかに外反し、外面底部はわずかに凹んでいる。外面に刷毛目を施す。023は磁石である。粒の細かな砂岩で両面を磁石として使用している。端部を丁寧に磨いている。

SK035(第3図)調査区の西側に位置する。平面形は隅丸の長方形を呈し、長径92cm、短径75cm、深さ26cmを測る。断面は浅皿状で覆土は暗茶褐色を呈す。弥生の壺片や黒耀石剥片が出土した。

2)溝

SD028(付図)調査区の西側に位置する。土軸を東西にとり、西側に流れる。幅約20cm、深さ10cmを測る。覆土は単層で黒褐色を呈し、やや粘性を帶びる。底面に杭状のピットを数個検出した。SK027に繋がる直前に底面のレベルは僅かに高くなる。弥生時代中頃の壺口縁が1点出土した。

3 古墳時代の遺構と遺物

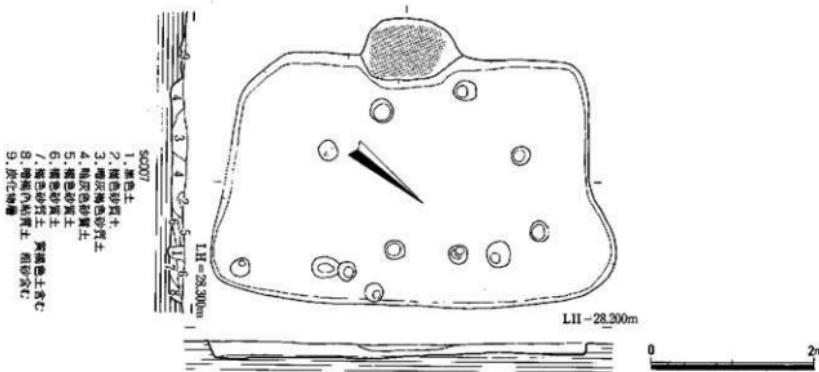
竪穴式住居9軒、土塙4基、溝2条を検出した。遺構は調査区全体に分布する。

1)竪穴式住居

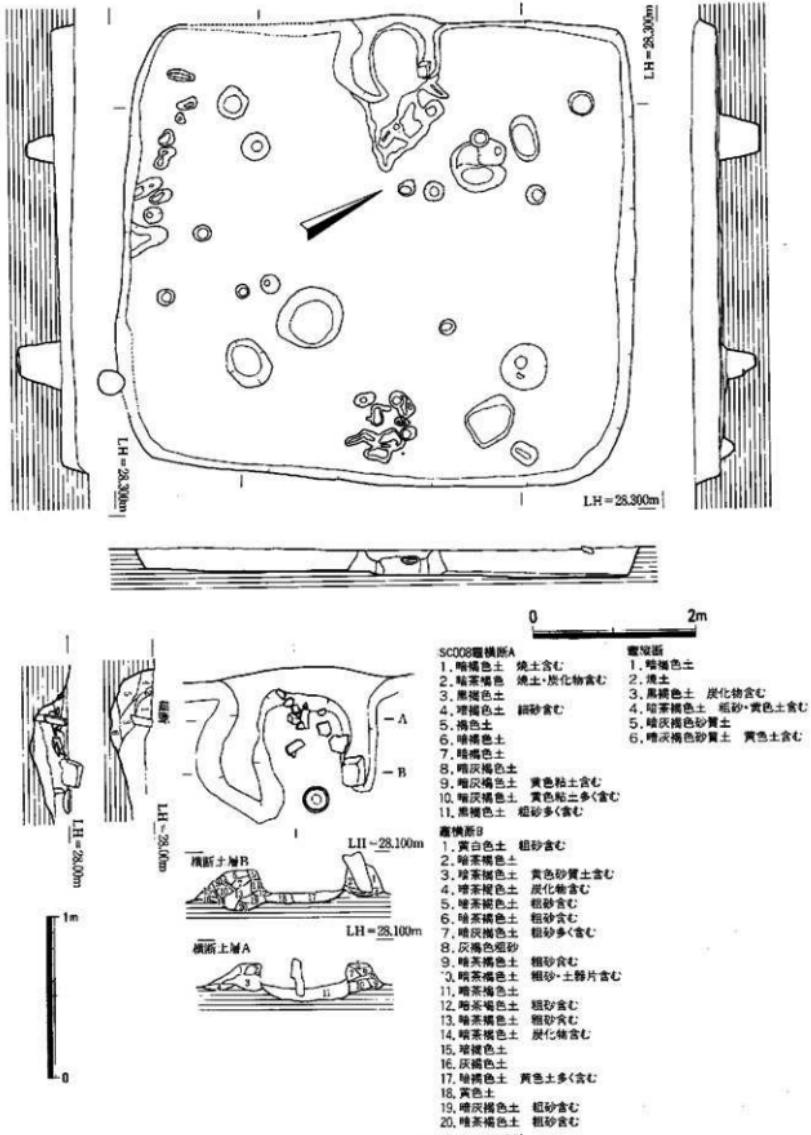
SC007(第5図)調査区の中央に位置する。主軸をN-40.5°-Wにとる。南西壁362cm、北東壁463cm、北西壁292cm、南東壁283cmを測る。平面形は北側長辺がやや長い隅丸台形を呈する。床面からの残存高は16cmを測る。主柱穴は明確ではないが2本と思われ径25cm、深さ14~45cmを測る。南西壁の中央に120×50cm程の拡張部があり、電痕跡と思われる。床面から12cm程高くやや住居側に傾斜しており、上面には炭化物が堆積している。南八幡造跡にみられるような壺の両側に一段高い壠状遺構をもち、元の平面形は正方形に近いものではないかと思われる。住居跡床面から15cmほど浮いた状態で土師器壺が2~3個体分出土しているが、小片のため復元できなかった。

SC008(第6図)調査区の中央に位置する。主軸をN-63°-Wにとる。南北517cm、東西556cmを測る。平面形は隅丸の方形を呈し、床面からの残存高は24cmを測る。主柱穴は4本で径32~57cm、深さ32~

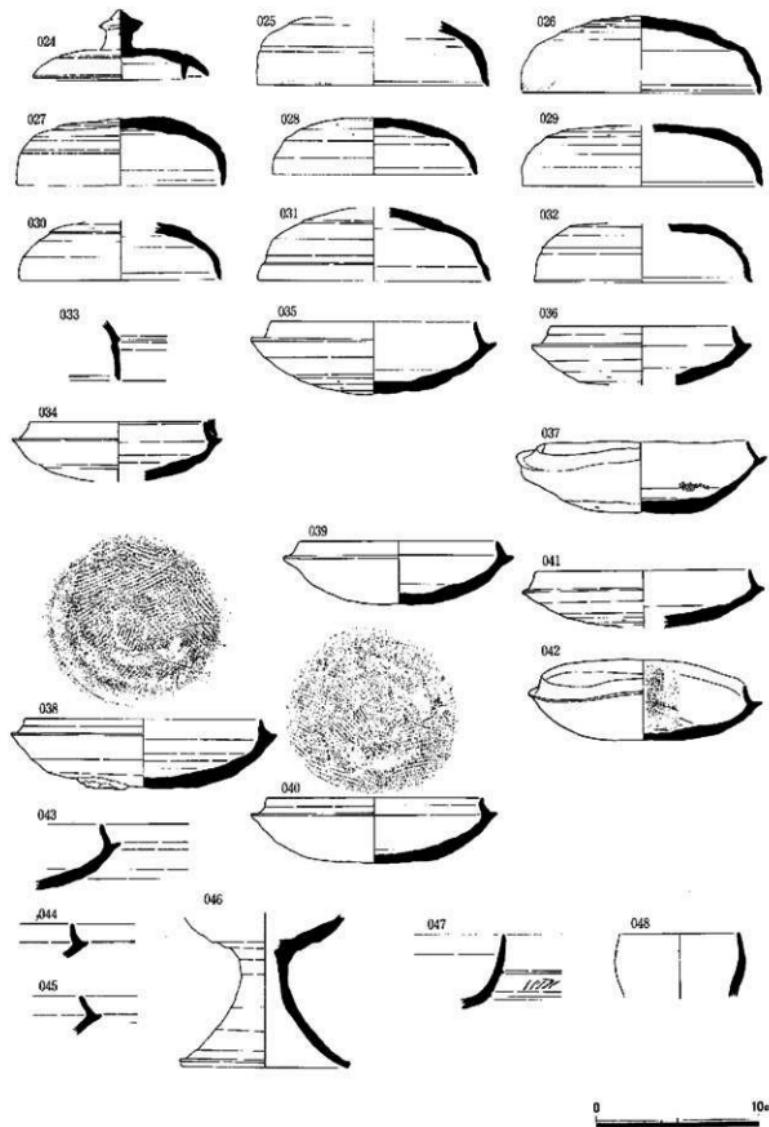
43cmを測る。柱痕跡は13~20cmを測る。竈は現状で幅111cm、奥行き93cmを測る。床面からの残存高は13cmである。袖部は床面を一段掘り窪めた上に暗褐色の粘土を材料にして構築しており、粗砂を層状に含む。袖部内に焼土ブロックを含んでおり、竈の作り替えが行われたと考えられる。右袖部に礫を入れて補強している。炉内の中央奥壁寄りに右の支脚がおかれており、その周りに土器器底片が散乱していた。炉内は焼骨を多量に含む暗褐色の粘土が詰まっていたが、その中から甕の破片と共に水に置かれた須恵器环が出土しており、住居の廃棄時に竈の祭祀が行われたと考えられる。出土遺物は竈の周辺から土器器の甕、甌、須恵器环がまとまって出土しており、また住居跡全体からは鐵鐵、袋状鉄鋸、滑石製軽車、水晶片などが出土した。出土遺物(第7-8図024~057)、024~033は須恵器の环である。024は頸部が長く断面が三角形のつまみをもつ。口径は7.8cm、器高4.3cmを測る。内面に环身のうけをもつ。灰白色を呈し胎土は精良である。調整は全面ナデである。025は口径12.7cm、器高4.2cmを測る。外面は黒色を呈し胎土は白色砂を含む。口唇部に段をもつ。026は口径14.5cm、器高4.8cmを測る。外面は黒味を帯びる。焼成は良好である。天井は回転ヘラ削りである。027は口径12.7cm、器高4.2cmを測る。灰白色を呈し胎土は精良である。天井は平らで回転ヘラ削りを行う。内面にヘラ記号あり。028は口径12.4cm、器高3.6cmを測る。外面は灰色を呈し自然釉がかかかる。口縁内部に段を持つ。胎土は細かく小さな砂を多く含む。029は口径14.6cm、器高3.8cmを測る。外面は黒褐色を呈し胎土は良好である。外面上部は回転ヘラ削りで残りはナデ調整である。口唇部に段をもつ。030は口径12.3cmを測る。口唇に段をもつ。灰色を呈し、胎土は白色砂を多く含む。天井は回転ヘラ削りである。031は口径14.2cm、器高約4.6cmを測る。032は口径13.2cm、器高3.6cmを測る。口唇部に段をもつ。灰白色を呈し、胎土は精良である。033は復元口径は11.2cmである。外面の棱は丸みを帯びる。灰色を呈し、胎土はやや粗い。口唇部に段をもつ。034~045は須恵器环身である。034は復元口径10.7cmを測る。黒灰色を呈す。たちあがりは比較的短く内傾する。端部は丸い。外面底部の半分以上に手持ちによるヘラ削りが施されている。焼成時に蓋をしていたらしく蓋の口唇部が付着している。035は口径12.5cm、器高4.5cmを測る。外面底部に一部自然釉がかかる。外面と内面は器色が違い、焼成時は蓋をしていたと思われる。たちあがりは直線的で内傾する。外面底部はヘラ削りである。



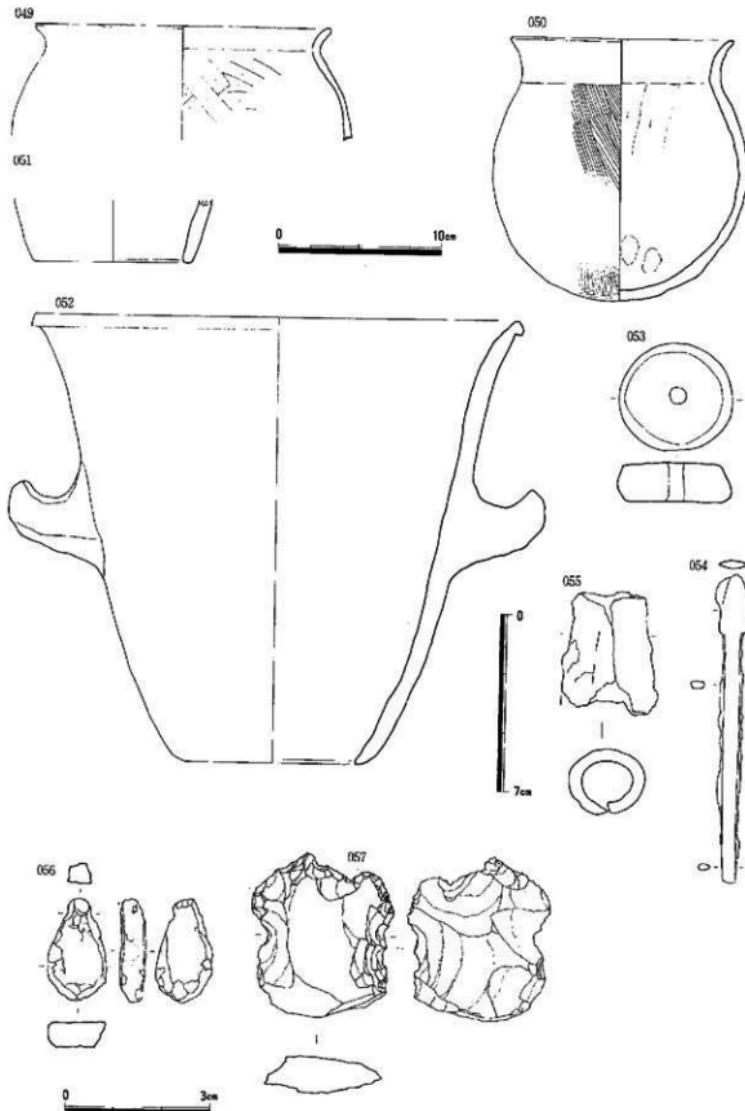
第5図 SC007造構実測図(1/60)



第6図 SC008調査実測図(1/60・1/30)



第7図 SC008出土遺物実測図(1)(1/3)



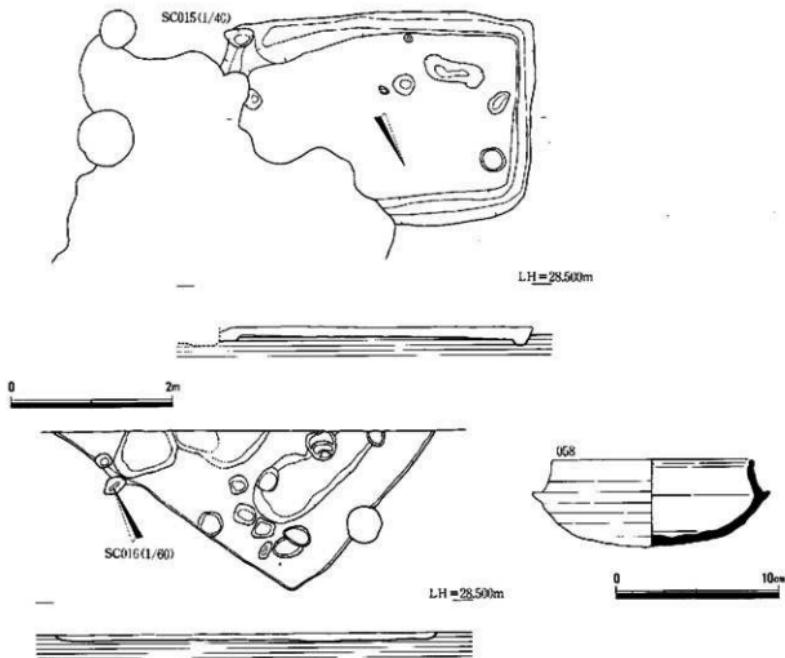
第8図 SC008出土遺物実測図(2)(1/3・1/2・1/1)

036は口径11.3cmを測る。外面底部は回転ヘラ削りで黒味を帯び光沢がある。たちあがりはやや短く内傾する。端部は丸く、外面半ばに段をもつ。037は口径13.2cmを測る。外面底部は回転ヘラ削りを施す。内面には棒状の道具で擦った痕跡と底部にヘラ記号が施されている。焼き亞みかひどく平面形は隅丸方形を呈す。たちあがりの器壁は薄く内傾する。038は口径14.3cm、器高4.2cmを測る。外面に叩き痕、内面に受け痕跡が見られる。外面底部には他の土器の一部と自然釉が付着している。たちあがりは短く内傾している。外面中途に段をもつ。039は土師器坏である。復元口径12cmを測る。外面底部は手持ちのナデで、ヘラ記号を施している。040は口径13.3cm、器高4cmを測る。内面底部に叩き当具痕が見られる。外面は不透明の自然釉が厚くかかり、調整は不明である。たちあがりは短く内傾する。内外両面に段が見られる。041は口径13.1cmを測る。たちあがりは長く、内傾する。受け部に蓋の口端が付着している。坏部は浅く直線的で、外面底部に回転ヘラ削りを施す。暗灰褐色を呈し、胎土は精良である。042は平面形が構円形を呈し、口径は長径12.5cm、短径10.6cmを測る。内外面とも赤褐色を呈し内面にヘラ記号を施す。たちあがりは短い。焼き亞みかひどく全体的に歪んでいる。外面は手持ちのナデである。043はたちあがりは長めで内傾するが途中から垂直に立ち上がる。044はたちあがりは短い。外面半ばに段をもつ。045はたちあがりは長めで内傾する。046は土師器高坏である。淡橙色を呈し白色砂を含む。047は須恵器の無蓋高坏である。灰色を呈す。外面の脇部中段と下段に突帶をもち、その間に斜めのヘラ描き文を施す。048は須恵器口縁である。器種は不明である。復元口径7.3cmを測り、ナデ調整を施す。049は土師壺である。復元口径18.1cmを測り暗赤褐色を呈す。外面は2次焼成を受け風化が激しい。内面は斜め方向のヘラ削りを施す。050は土師器変である。復元口径13.6cm、器高17.1cmを測る。外面は刷毛目を施すが2次焼成を受け、風化が著しい。内面は脇部上面は縱方向の削り、下半は指オサエである。051は土師器壺である。橙色を呈し、ナデを施す。052は土師器の概である。口径29.5cm、器高27.4cmを測る。調整は不明。底部に一文字形に粘土帶を貼り付けている。ほぼ完形品である。053は滑石製の筋錐車である。径4.7cm、高さ1.6cmを測る。中心に径7mmの穴があく。054は鉄鍬である。先端は二等辺三角形を呈し、12cmの茎がつく。055は鉄斧の袋部である。056は水晶の小片である。菱形を呈し、片方は抉りが見られる。一部に磨いた痕跡があり、装飾具の未製品と思われる。057は安山岩製スクレイバーである。

SK015(第9図) 調査区のはば中央に位置する。SK023に切られるが平面形は長方形を呈し、長径25.9cm、短径17.5cmを測る。床面からの残存高は12cmである。壁に沿って周間に幅14~26cmの周溝が巡る。深さは床面から3~5cmを測る。柱穴と思われるピットは確認できなかった。出土遺物は細かな土器の細片と鉄洋、黒耀石が出土している。明確な時期は不明であるが、古代まで降る可能性がある。

SC016(第9図) 調査区の東寄りに位置する。平面形は方形を呈すると思われるが、全容は不明である。水田に削られており、遺構の遺存状態はよくない。床面からの残存高は4cmを測る。主柱穴は確認できなかった。堆土中から須恵器の坏が出土した。出土遺物(第9図058)。058は須恵器坏である。復元口径12.1cm、器高5.4cmを測る。灰色を呈す。たちあがりは長く、内傾し途中から垂直に立ち上がる。内面口唇に段をもつ。外面底部は回転ヘラ削りを施す。

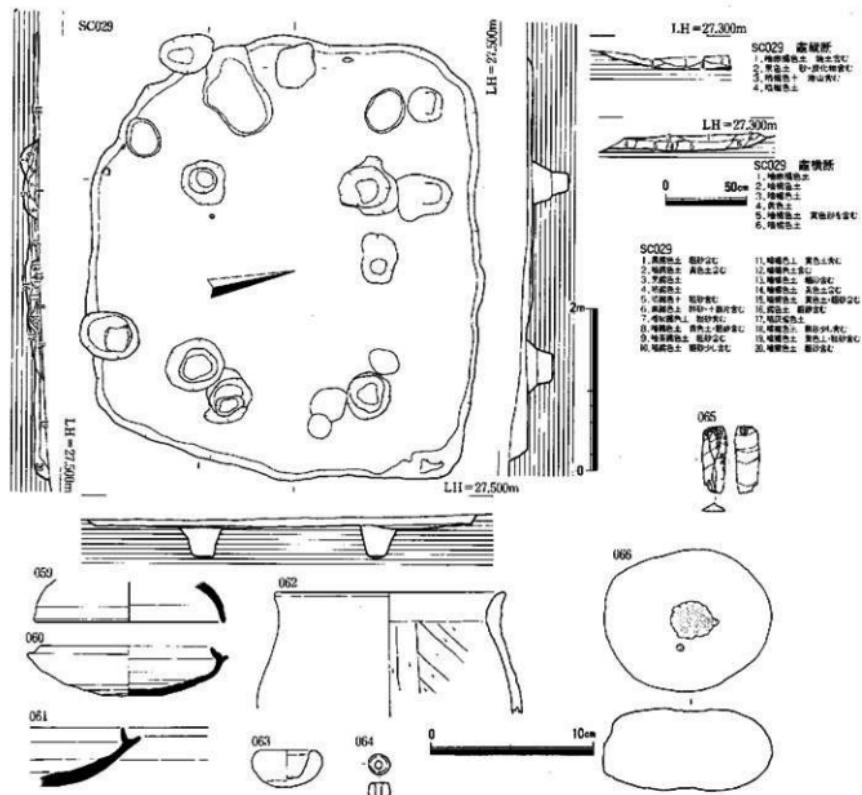
SC029(第10図) 調査区の西端に位置する。主輪はN-79°-Wをとる。平面形は隅丸の方形を呈し、北辺483cm、南辺415cm、東辺423cm、西辺411cmを測る。北辺に比較して南側のコーナーは丸みを帯びている。床面からの残存高は16cmである。西壁中央に竈を設ける。袖部が残存していないので規模は不明である。火床は床面より5cmほど高くなっている。主柱穴は4本で径51~69cm、深さ24~49cm、柱痕跡は13cmである。柱間は200~250cmを測る。遺物は須恵器坏、土師器變の他に石包丁、凹石、扁平片刃石斧、鉄製刀子、鉄洋などが出土している。出土遺物(第10図059~066)。059は須恵器の坏蓋である。口径11.6cmを測る。口縁部に僅かな段をもつ。端部は丸い。060·061は須恵器坏身である。060は口径10.6cm、器高3cmを測る。たちあがりは短く内傾し、外面の一部に段をもつ。体部は浅く丸みをもち、外面底部は回転ヘラ削りである。061は灰白色を呈す。たちあがりは短く僅かに内傾する。外面は口縁直下まで回転ヘラ削りを施す。062は土師器變である。復元口径14.1cmを測る。外面は2



第9図 SC015・SC016遺構・出土遺物実測図(1/60・1/40・1/3)

次焼成を受け、風化が激しい。内面側部はヘラ削りである。063は土師器碗である。口径3.5cm、器高2.3cmを測る。浅い黄橙色を呈し、調査は指オサエによる。064はガラス小玉である。径4.5mm、高さ3.1mmを測り、コバルトブルーを呈す。065は黒耀石の縦長裂片である。長さ4.1mmを測る。066は安山岩製の凹石である。

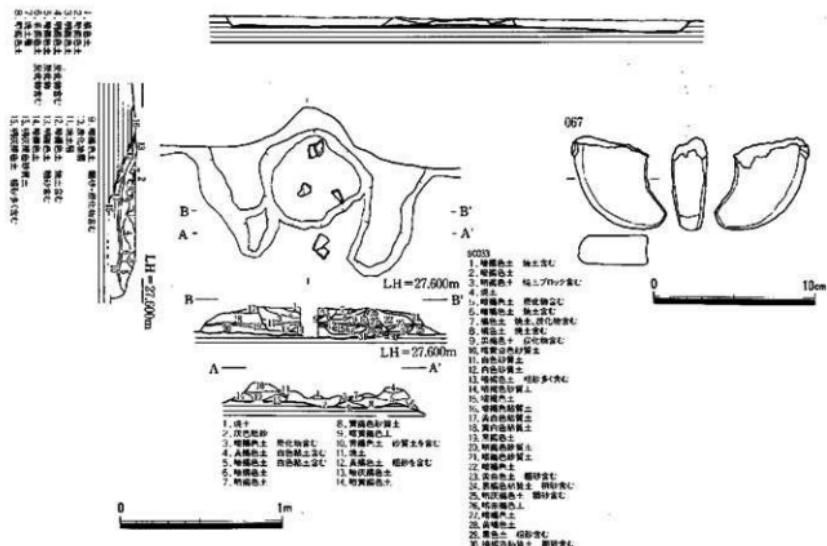
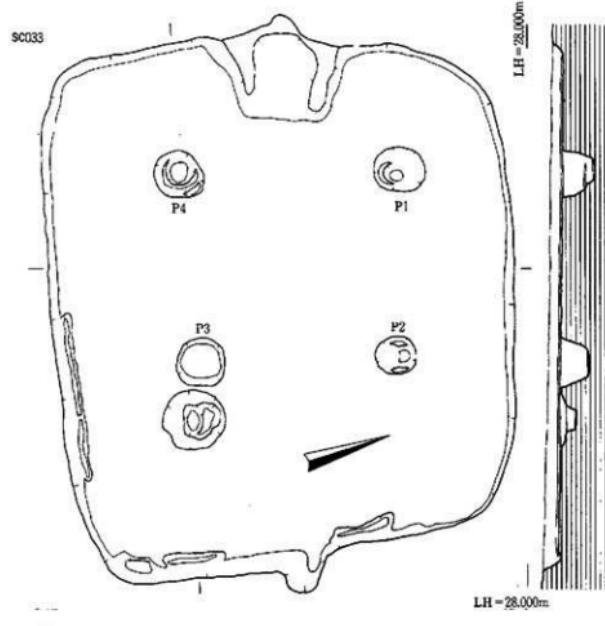
SC033(第11図)調査区の西側に位置する。主軸をN-72°-Wにとる。SC034・SC037を切る。平面形は方形を呈し、西壁の窓道部分がわずかにとびだしている。東西697cm、南北508cmを測る。東壁と南壁に沿って切れ切れに幅15cmの壁溝がある。主柱穴は4本で正方形に配されており、P1-P4間が240cm、あとは200cm間隔である。柱穴は径45~57cm、深さ約50cm、柱痕は13~21cmを測る。床面からの残存高は20cm前後である。底から6cmの厚さで黒褐色の砂混じり土を観察した。貼り床と思われる。窓は白色粘土に砂を混ぜて構築しているが、袖は基部や中心に粗砂を多く使い、周間に粘土を多く使用している。幅は127cm、奥行き119cmを測る。床面からの残存高は19cmである。出土遺物には鉄製



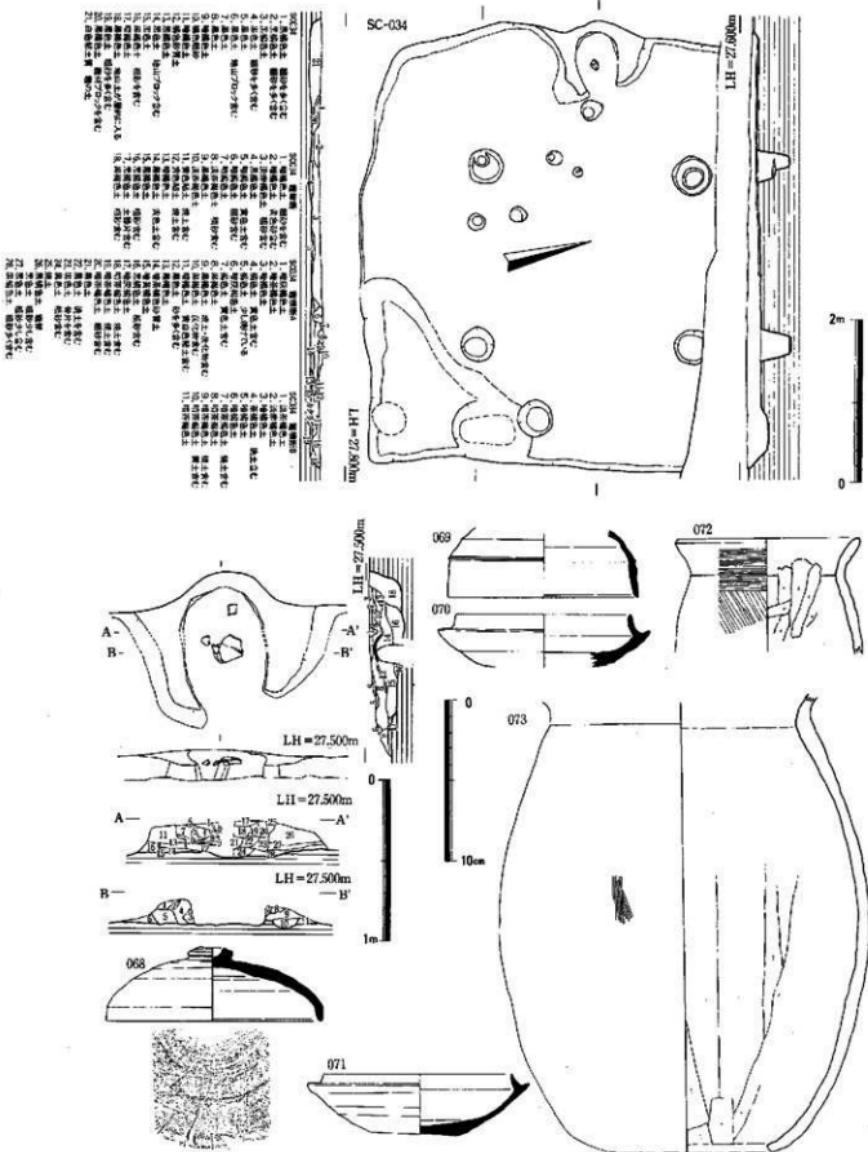
第10図 SC029造構・出土遺物実測図(1/60・1/30・1/3・065-069)

刀子片、滑石製品の他、弥生瓦片、磨製石斧片、黒耀石剝片等がある。出土遺物(第11図067)は滑石製品である。外側の割れ面付近に突起が見られる。子持ち勾玉の破片の可能性がある。

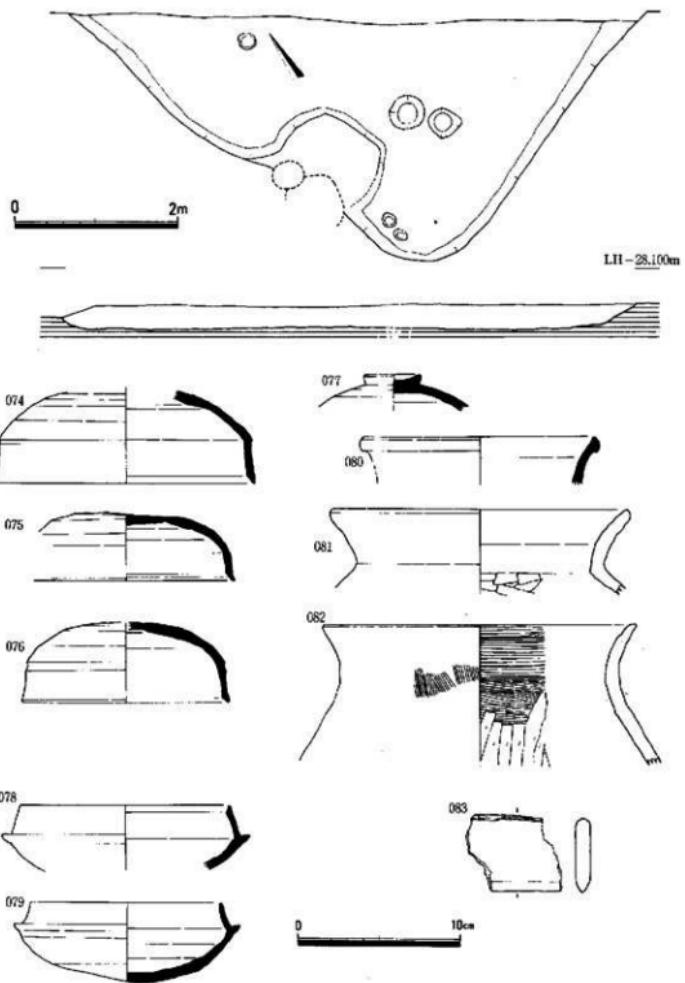
SC034(第12図)調査区西側に位置する。SC037を切り、SC033に切られる。北側は調査区外に延びるが、現状で東西536cmの方形住居である。床面からの残存高は13cmである。西壁中央に竈を設ける。主柱穴は4本で径40~49cm、深さ38~41cmを測る。柱間は南北芯々が250cm、東西が234cmである。柱痕は約16cmを測る。住居掘方は南東の隅を16cmほど掘り下げている。床に厚さ4cmの貼り床を観察した。黒色を呈し、粗砂を含む。竈は幅114cm、奥行き96cmを測り、煙道部が外側に突出している。主に暗褐色の粘土で作られているが、粗砂を多く含む。また、袖内に焼土ブロックが多く含んでおり、竈の作り替えが行われている。竈内中央には高さ35cmの石の支脚を設置している。出土遺物は須恵器の壊の他に鉄滓や、黒耀石の剝片石器などがある。出土遺物(第12図068~073)。068~069は須恵器の



第11圖 SC033遺構・出土遺物実測図(1/60・1/30・1/3)



第12図 SC034遺構・出土遺物実測図(1/60・1/30・1/3)



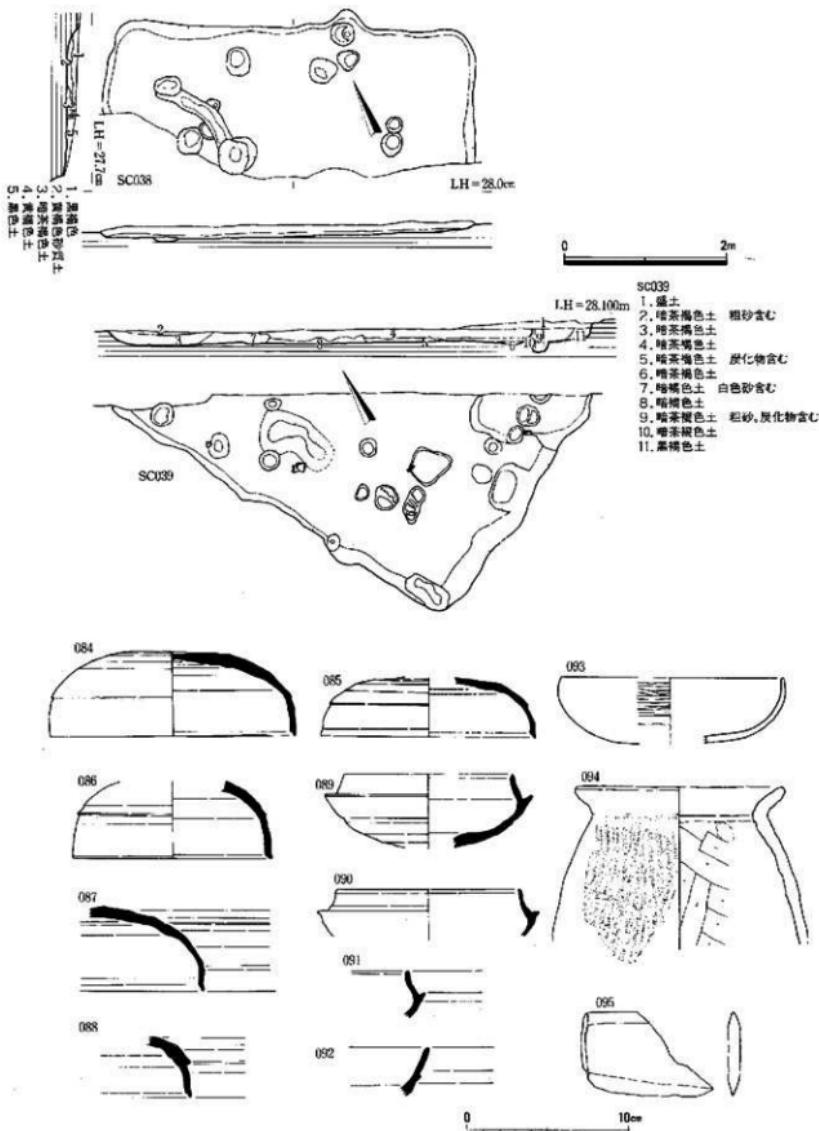
第13図 SC037遺構・出土遺物実測図(1/60・1/3)

壊蓋である。068は口径13.3cmを測る。つまみをもつが、中央部が半円状に窪んでいる。土器は肉厚でなだらかに下がるが口縁端から1cmのところで垂直に立つ。口縁端は丸い。外面上部はヘラ削りを施しており、その上からヘラ記号を施している。神ノ前窓に類例が見られる。069は口径11.5cmを測る。稜は三角形を呈し、口縁は長くわずかに外反する。070-071は坏身である。070は復元口径10.6cmを測る。たちあがりは長めで外面半ばに段がつく。器壁は肉厚である。071は口径11.6cm、器高3.8cmを測る。たちあがりは短く内傾する。底部は平らで回転ヘラ削りを施す。072は土師器甕である。復元口径11.1cmを測る。外面胴部は斜めのミガキ、内面は下方向のヘラ削りである。073は土師器甕である。胴部は中央部で膨らんだ円筒状を呈す。外面は褐色を呈し、白色砂を多量に含む。外面は不明瞭であるが継刷毛、内面は上方方向の削りである。底部は焼成後打ち欠いている。

SC037(第13図)調査区西側に位置する。SC033-SC034に切られる。平面形は方形を呈するが、住居北側の半分以上が調査区外に延びており、コーナーが一つしか確認できなかったので、全容は不明である。床面からの残存高は22cmを測る。南西の壁際に白色の粘土の塊があり、竈の残骸であると思われる。主柱穴から須恵器の坏身が完形で出土した。出土遺物(第13図074~083)。074~077は須恵器坏蓋である。074は復元口径15.7cmを測る。灰黄白色で胎土は粗い。稜は小さく下にわずかな沈線が入る。口縁は長くわずかに外反する。口唇内面には明確な段がつく。外面天井は回転ヘラ削りである。075は器高4.1cmである。暗灰褐色を呈し、わずかに砂を含む。稜はつかずわずかなへこみが見られる。口唇は外反し、内面には明確な段がつく。天井は平らで回転ヘラ削りを施す。076は復元口径12.8cmを測る。暗灰褐色を呈す。口縁は外反し、口縁内部に明瞭な段を持つ。後の下がわずかに窪んでいる。外面上半は回転ヘラ削り、口縁は横ナデである。内面天井にタタキの圧痕がみられる。077はつまみである。灰色を呈す。外面上部に回転ヘラ削りを施した後、浅皿状のつまみを張り付けている。078-079は須恵器坏身である。078は復元口径12.9cmである。たちあがりは細長く直線的に内傾する。口唇内面に段がつく。端部は丸い。ナデ調整を施す。暗灰色を呈し、白色砂を含む。079は口径11.7cm~11.4cm、器高5cmを測る。たちあがりは細長く内傾する。外面底部は半分ほど回転ヘラ削りを施し、残りはナデ調整である。壊蓋をした状態で焼成を行っている。主柱穴から正置した状態で出土した。080は須恵器甕口縁である。外面黒褐色を呈す。復元口径14.3cmを測り、外反しながらたちあがる。081-082は土師器甕である。081は復元口径17.9cmを測る。外面胴部はミガキである。内面は口縁と胴部間に明確な棱を持ち、胴部には細かな単位の横方向のヘラ削りを施す。082は復元口径19cmを測る。頸部のしまりは緩く、口縁まで曲線を描きながら外反する。外面胴部は継刷毛を施すが風化が激しく不明瞭である。内面は口縁から頸部は横刷毛を施し、胴部は下方向の削りを施す。083は石器である。片方に両刃を研ぎだしている。石包丁の可能性が考えられるが、厚さが1cmと肉厚である。

SC038(第14図)調査区の西南隅に位置する。平面形は方形を呈すると思われるが、南側半分を金属川支流に削られており、現状で南北長183cm、東西長453cmを測る。床面からの残存高は9cmを測る。出土遺物は須恵器坏・脚部・四角い透穴の高杯・土師器甕・鉄滓などがあるが、いずれも細片である。

SC039(第14図)調査区の中央北側に位置する。平面形は方形を呈す。遺構の大半は調査区外に延びており、コーナーは一つしか出でていないが、現状で南北480cm、東西332cmを測る。床面からの残存高は18cmである。南西の壁際に白色粘土と焼土の塊があり、竈の残骸と思われる。柱穴は確認できなかった。須恵器の坏や甕、土師碗の他に、弥生時代中頃の甕や鉄滓、石包丁、黒曜石の剥片などが出土している。出土遺物(第14図084~095)。084~088は須恵器坏蓋である。084は口径14.9cm、器高5.1cmを測る。暗灰色を呈し白色砂を含む。稜はほとんどみられず、天井端部に巡らす1条の沈線に痕跡を残す。口縁は直下に下りて端部には明確な段がみられる。085は口径13.1cmを測る。灰白色で胎土は精良である。天井は平らで全体的に扁平である。稜は鈍くなっていて口縁は「V」の字に開きながら端部は内傾する。頸部に明確な段がみられる。086は口径12.3cmを測る。暗灰色を呈し胎土は粗い。稜は鈍くかすかにみられる程度で、口縁はわずかに「V」の字に開く。端部には不明瞭な段がみられる。087は灰色で白色砂を多く含む。稜はみられず緩やかなカーブを描く。天井部外面は回転ヘラ削りを



第14図 SC038・SC039遺構・出土遺物実測図(1/60・1/3)

施すが、あとはナデ調整である。口縁端部は段がみられる。088は外面黒褐色で白色砂を含む。天井部に粘土を貼り付け後を作り出している。口縁は短く直下に下り、端部には段がみられる。089～091は須恵器坏身である。089は器壁は薄く、たちあがりは短めで内傾している。口縁端部に段がみられる。090はたちあがりは内傾した後直立する。口縁端部に段がみられる。器壁は薄く灰色を呈し胎土は精良である。091は灰色を呈し白色砂を多く含む。たちあがりは内傾した後直立する。口縁端部は丸い。092は無蓋壺である。外面は黒褐色を呈し、胎土は粗い。口縁は逆「ハ」の字形に広がる。外面脇部に突堤1条と上下に沈線1条ずつを巡らす。093は土師器椀である。橙色を呈す。復元口径13.5cmを測る。外面は上部が横位のミガキを施す。下部は不明瞭であるが、削りにみえる。内面は風化のため不明瞭である。094は土師器甕である。暗橙色を呈し白色砂をわずかに含む。「H」径は12.3cmを測る。口縁は短く逆「ハ」の字に開き、ナデ調整を施す。外面脇部はタタキ、内面は斜位の削りである。両面ともくびれ部に指オサエを施す。095は安山岩製の石包丁である。片方の長辺に両刃の刃部を研ぎだしている。

2) 土壙

3基を検出した。調査区の西側半分に分布している。

SK005(第15図)調査区の南側に位置する。平面形は東西に長い長方形を呈し、長径78cm、深さ21cmを測る。須恵器片が出土した。

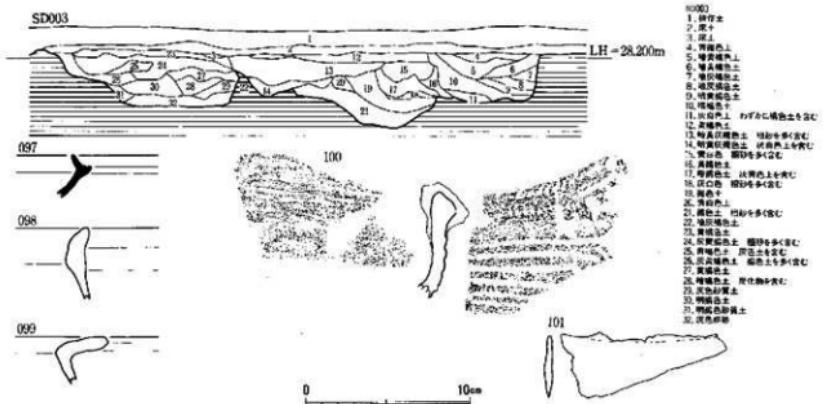
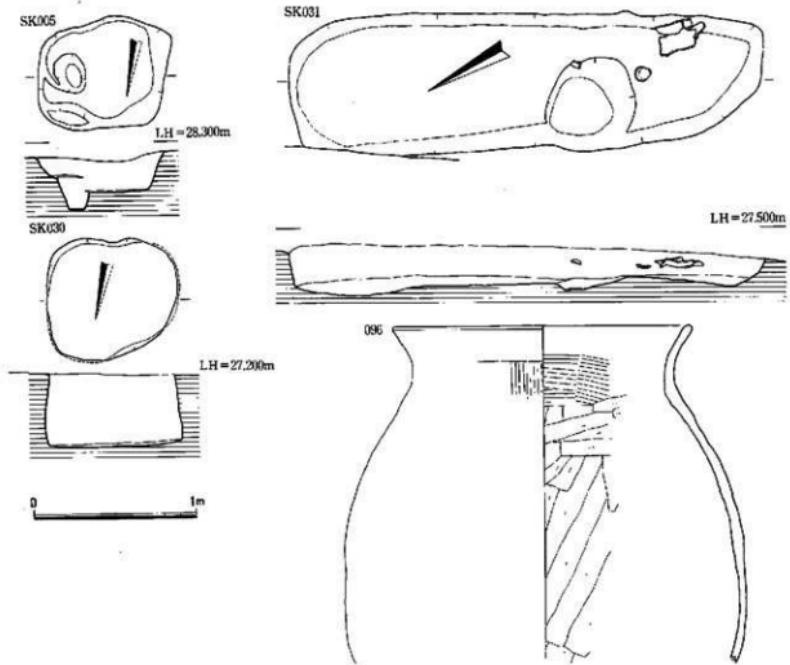
SK030(第15図)調査区の西隅に位置する。平面形は不整円形を呈し、長径82cm、短径74cmを測り、深さ45cmを測る。覆土は黒褐色で砂を多く含む。土師器甕の細片が出土している。

SK031(第15図)調査区の西側に位置し、SC029に切られる。主軸をN-27°-Eにとる。平面形は南北に長い長方形で長径286cm、短径85cm、深さ24cmを測る。断面は浅皿状を呈する。中央南寄りに径53cmの円形の窪みがあるが、SK031に伴うものは不明である。須恵器の甕片・环片や土師器の甕口縁、椀が出土している。出土遺物(第15図096)は土師器甕である。暗褐色を呈し白色砂を多く含む。口径18.2cmを測る。頭部のしまりは緩やかで、口縁は逆「ハ」の字に開き内面は横刷毛を施す。外面脇部は縱刷毛、内面脇部は斜め方向の削りを施す。

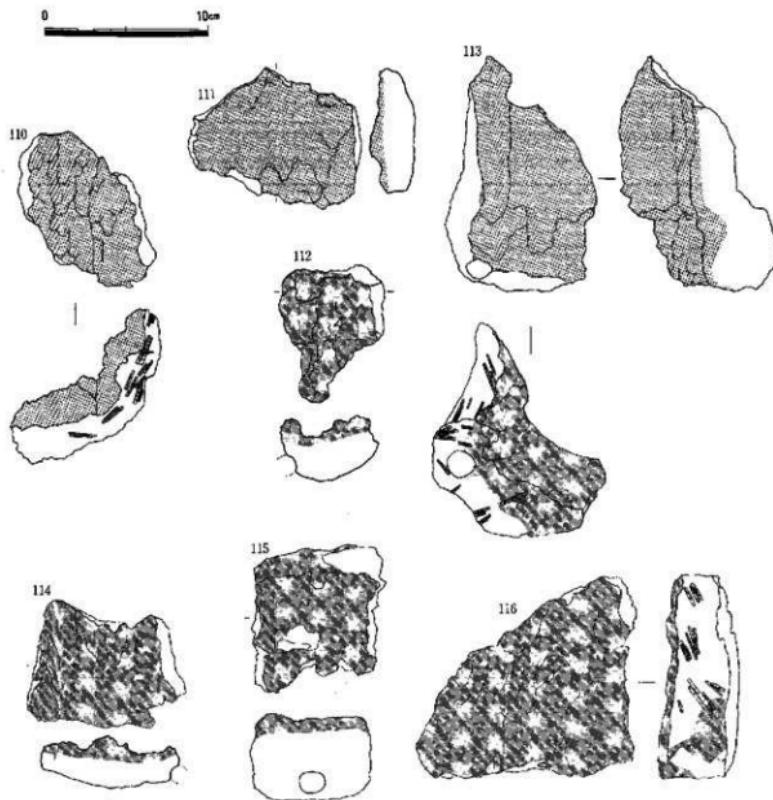
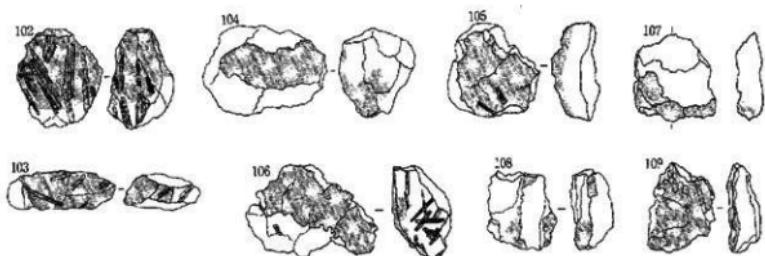
3) 潟

2条を検出した。調査区の中央部で切れているものの、向きから一連のものと考えられる。

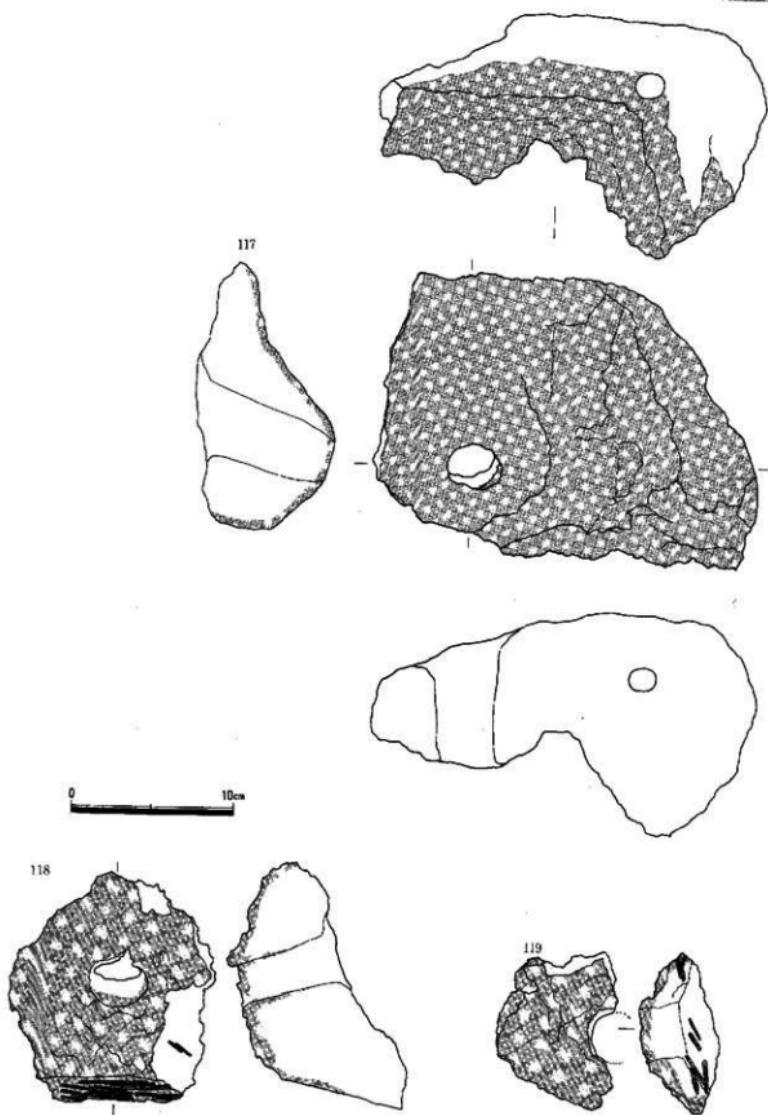
SD003(付図)調査区の南東端に位置する。ほぼ南北に流れるが、調査区南端で東に曲がり調査区外に延びる。幅は約320cm、深さは東端部で50cmを測り最大では100cmを測る。土層断面(第15図)では何度も掘り直されたと考えられる。埋上からは流水等の痕跡もみられるが、人為的埋没と思われる層が多い。遺物は古墳時代後半の須恵器の坏蓋、坏身を主として、縄文土器・弥生土器が出土している。その他鉄滓、難の羽口と共に多量の炉壁が出土している。炉壁は非常に脆いか全くローリングをうけていないため、すぐ近辺に製鉄関連施設があったと思われ、SD003もそれに伴う可能性がある。出土遺物(第15・16・17図097～119)。097は須恵器の坏である。灰白色を呈す。たちあがりは短く内傾する。098は土師器甕口縁である。外面はほぼ直立し、内面は「く」の字形で頭部に明瞭な稜がみられる。暗橙色を呈す。099は弥生甕口縁である。100は攤文の深鉢型土器で波状口縁である。101は鉄製の刀子である。102～119は炉壁である。102～104は炉頂部である。熱により赤変しているが、ガラス化はしていない。粘土中にスサの圧痕が多くみられる。105～106は炉上部である。表面は熱でガラス化している。白色砂を多く含む。107～109は砂鉄焼結岸である。107は炉壁に溶着した砂鉄が溶けかけた状態がみられる。表面2～5mmほどガラス化している。110～113は炉の中段部分である。110は炉のコーナー部で、炉体は白色砂とスサを多く含み、表面は厚くガラス化している。111は厚さ1.5cm程ガラス化し、液状に垂れているのがみられる。112は縦方向の木舞孔の痕跡がみられる。ガラス化はかなり厚くなり、垂れている。113はコーナー部で、径2.5cmの木舞孔がみられる。炉体はスサを多く含み、底部は炉体の粘土の締ぎ目であるが、かなり奥までガラス化している。114～116は炉の下部である。いずれも白色砂を多く含み、スサ痕跡も多い。



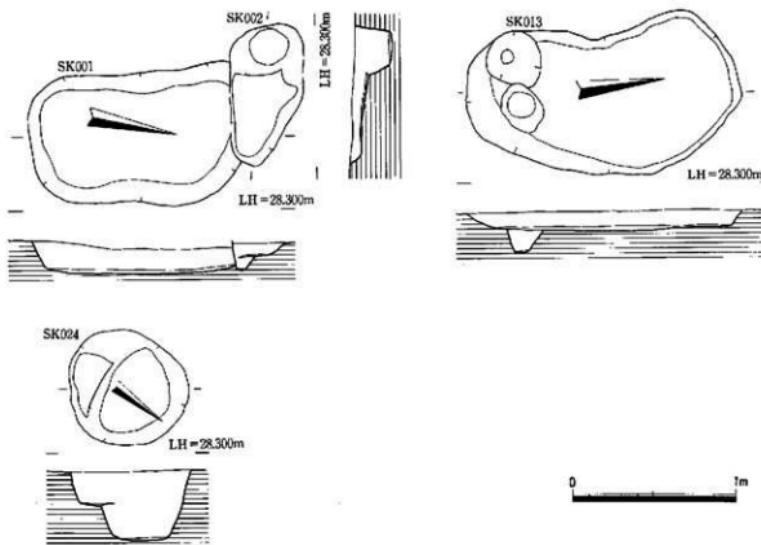
第15図 SK005・030・031・SD003遺構・出土物実測図(1/30・1/3)



第16図 SD003出土炉壁実測図(1)(1/3)



第17図 SD003出土炉壁実測図(2)(1/3)



第18図 SK001-002-013-024造構実測図(1/30)

厚くガラス化し、かなり下に垂れている。114は木舞孔の痕跡がある。115は長径2.1cm、短径1.8cmの木舞孔がみられる。表面に炉壁の粘土の繊ぎ目がみられ、かなり奥までえぐられている。116は下部の端が奥まで焼けており、送風口があったと思われる。ガラス化の厚さは1cmを測り、全面垂れている。117~119は炉底部である。117はコーナー部分で木舞孔と送風口がついている。木舞孔は径2.5cmの円形を呈す。送風口は径4~5cmを測る。炉壁はやや内傾し、送風口は炉に風があるように下を向いている。底部にはガラス化したスサ痕跡が多くみられ、炉と炉壁の間にはスサをしいている。118~119も送風口付である。118の送風口の径は3~4cmを測る。送風口の上側はかなり焼体がえぐれている。下はあまりえぐられていないがガラス化した部分が多く壁面が垂れているのが観察できる。117と同様に送風口はやや下向きになると想われる。炉体との繊ぎ目にはスサ痕跡が多くみられる。119の送風口は約4cmを測る。送風口から出てくる冷たい空気のためか送風口の周囲はあまり炉壁がえぐられずに残っている。その他、炉壁同士がくっついているものもみられ、ガラス化した部分が固まらない熱いうちに炉を壊したことがわかる。SD003からは炉壁が79kg、鉄滓が87.5kg出土した。

4 古代の遺構と遺物

土壤4基、ピット多数を検出した。

SK001(第18図)調査区の南側に位置する。平面形は隅丸の長方形で、北側をSK002に切られる。現状で長径131cm、短径82cm、深さ14cmを測る。断面は浅皿状を呈す。土師碗片と鉄滓が出土した。

SK002(第18図)調査区の南側に位置する。平面形は東西に細長い不整形を呈し、長径84cm、短径44cm、深さ8cmを測る。土師器碗の小片が出土した。

SK013(第18図)調査区の東側隅に位置する。平面形は「く」の字形を呈し、長径165cm、短径84cm、深さ12cmを測る。断面浅皿状を呈す。南側をピットに切られる。回転ヘラ切りの土師坏片が出土した。

SK024(第18図)調査区の東南隅に位置する。平面形は円形を呈し径70~80cm、深さ42cmを測る。東南側に、底面から20cmの高さでテラスを持つ。土師器高台付坏、炉壁、鉄滓等が出土した。

5 中世の遺構と遺物

上塙6基、溝1条、ピット多数を検出した。

SK006(第19図)調査区のはば中央に位置する。SC007を切る。長径201cm、短径108cm、深さ10cmを測る。平面形は東西に長い楕円形を呈し、東西断面は浅皿状を呈す。底面はほぼ平らである。覆土は單一で、黒褐色の砂質土である。土師坏がうつ伏せの状態で出土した。出土遺物(第20図120~124)。120は土師坏である。淡褐色を呈し、胎土は精良である。口径14.8cm、器高4.25cmを測る。底部は丸みを帯びて狭い。121は青磁碗底部である。釉は薄く畳付のみ削りとっている。深縁を呈し貫入は細かい。胎土は灰色で粗い。122は磁石である。長さ7.6cm、最大幅4.7cm、厚さ2.3cmを測る。4面を使用している。123・124は須恵器坏である。123は灰白色を呈し、胎土は精良である。復元口径10.3cm、器高4.4cmを測る。口縁のたちあがりは長く内傾し、口唇部に明瞭な段をもつ。底部は平らで回転ヘラ削りを施す。124は灰白色で胎土は精良である。口縁は垂直に立ち上がり、受け部は断面三角形を呈す。口唇部に段をもつ。外面部は平らで回転ヘラ削りである。これらはSC007に伴うと思われる。

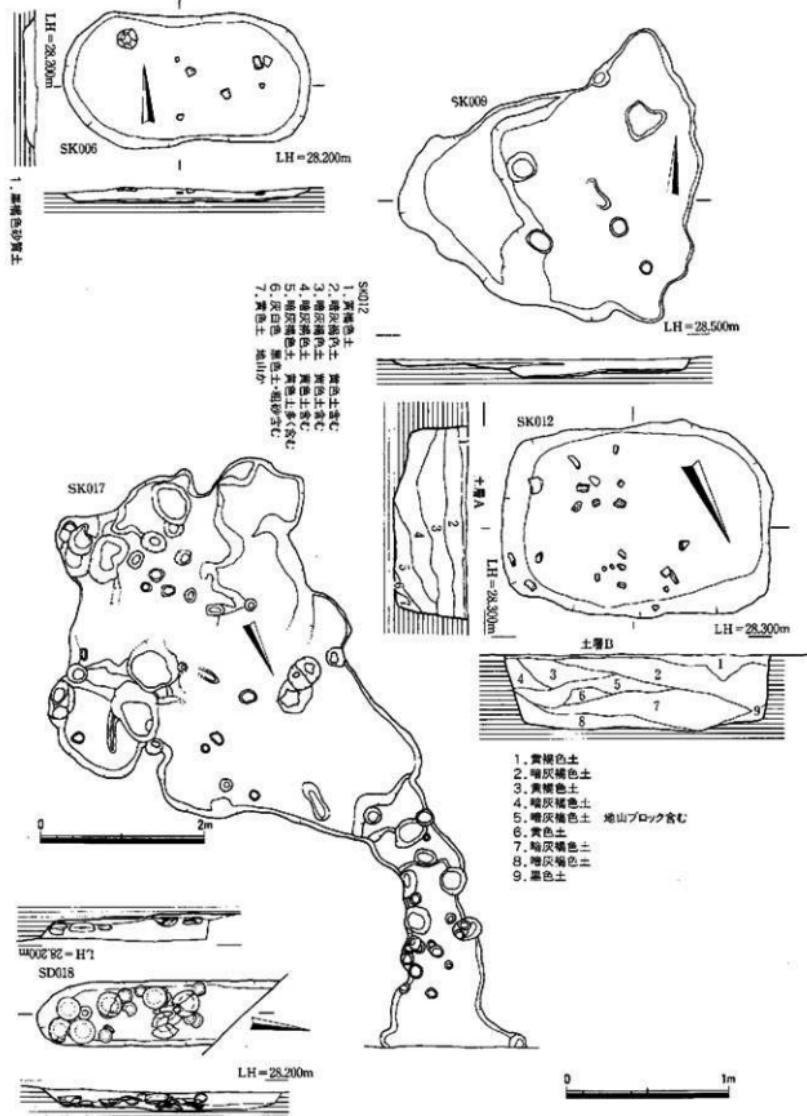
SK009(第19図)調査区の東側に位置する。平面は重な三角形を呈し東西370cm、南北300cm、深さ10cmを測る。覆土中から十脚桶、滑石片の他に須恵器大甕片、炉壁、鉄滓等が出土している。出土遺物(第20図125・126)。125は白磁碗底部である。釉は内面全面と外面は高台上部まで施釉される。薄く貫入は細かい。126は土師器碗である。断面三角形の高台が付く。外底部は横ナデで板状圧痕を施す。胎土に白色砂を含む。

SK010(付図)調査区のやや東寄りに位置する。平面形は東西に長い楕円形を呈し、長径121cm、短径74cm、深さ45cmを測る。東西両側に階段状のテラスを持つ。

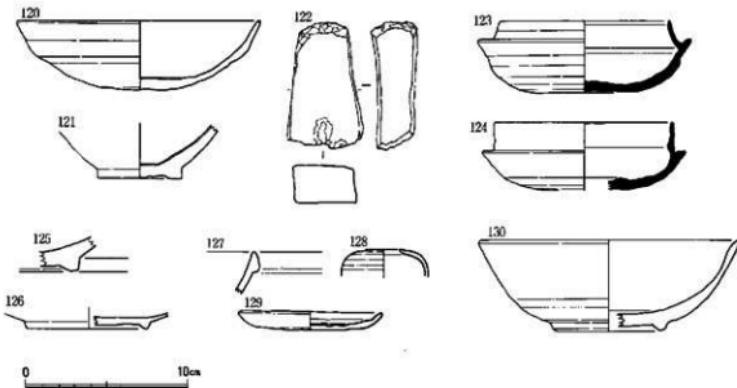
SK012(第19図)調査区の中央やや東寄りに位置する。主軸をN-64°-Wにとる。平面形は隅丸の長方形で長径163cm、短径119cm、深さ45cmを測る。断面は箱形を呈する。覆土は暗灰褐色を呈す。遺物は中層から高台付土師碗や玉縁口縁の白磁碗片等が出土している。

SK017(第19図)調査区の中央に位置する。平面形は不整の方形を呈し、長径443cm、短径339cmを測る。北西隅から溝状に延び、そのまま調査区外へ続く。深さは約30cmを測るが、底面は平らでなく、かなり凸凹がつく。覆土は粗砂や暗茶褐色を呈す。白磁、須恵器、鉄滓、滑石、その他土器が出土している。いずれも細片である。

SK023(付図)調査区東寄りに位置する。平面形は不整形を呈す。深さ約26cmを測るが底面は平らではない。覆土中から白磁、青磁、滑石片が出土した。いずれも細片である。出土遺物(第20図127~129)。127は玉縁の白磁碗である。釉は薄く口縁端で液垂れをおこしている。胎土は白色を呈し、粗い。128は白磁の小壺である。口径1.9cmを測る。外全体と内面口縁端に薄く施釉する。胎土は白灰色でやや粗い。129は土師皿である。浅黄橙色を呈し口径8.7cm、器高1.1cmを測る。外底部はヘラ



第19図 SK006・009・012・017・SD018遺構実測図(1/30・SK017は1/60)



第20図 SK006・SK009・SK023・SP0149出土遺物実測図(1/3)

切りで板状圧痕がある。SK017・023は粘土採掘穴と思われる。

SD018(第19図)調査区のほぼ中央に位置する。主軸をN-7.5°-Wにとり、SC008を切る。平面は南北に長い溝で幅40cm、深さ11cmを測る。断面は浅皿状であるが、底面に貼り付くようにして十師皿10枚と十師壺10枚が出土した。土師皿の中には口縁が黒く焦げているものがあり、灯明皿として使用されたものと思われる。出土遺物(第21図131~150)。131~140は十師壺である。口径は8枚が14.8~14.9cmの間に入り、1枚が14.2cm、1枚が15.2cmを測る。器高は3.0~3.5cmである。いずれも浅黄褐色を呈し、完形である。141から150は土師皿である。口径は8.2~8.7cm、器高は1.1~1.6cmを測る。浅黄褐色を呈し、胎土は精良である。底部は平らか、中心が1mmほどあがるものが多く、外側に張り出すものは2枚のみである。いずれも回転系切りで、多くに板状圧痕がみられる。10枚中3枚に口縁に焼け焦げた跡があり、灯明皿として使用されたものと思われる。

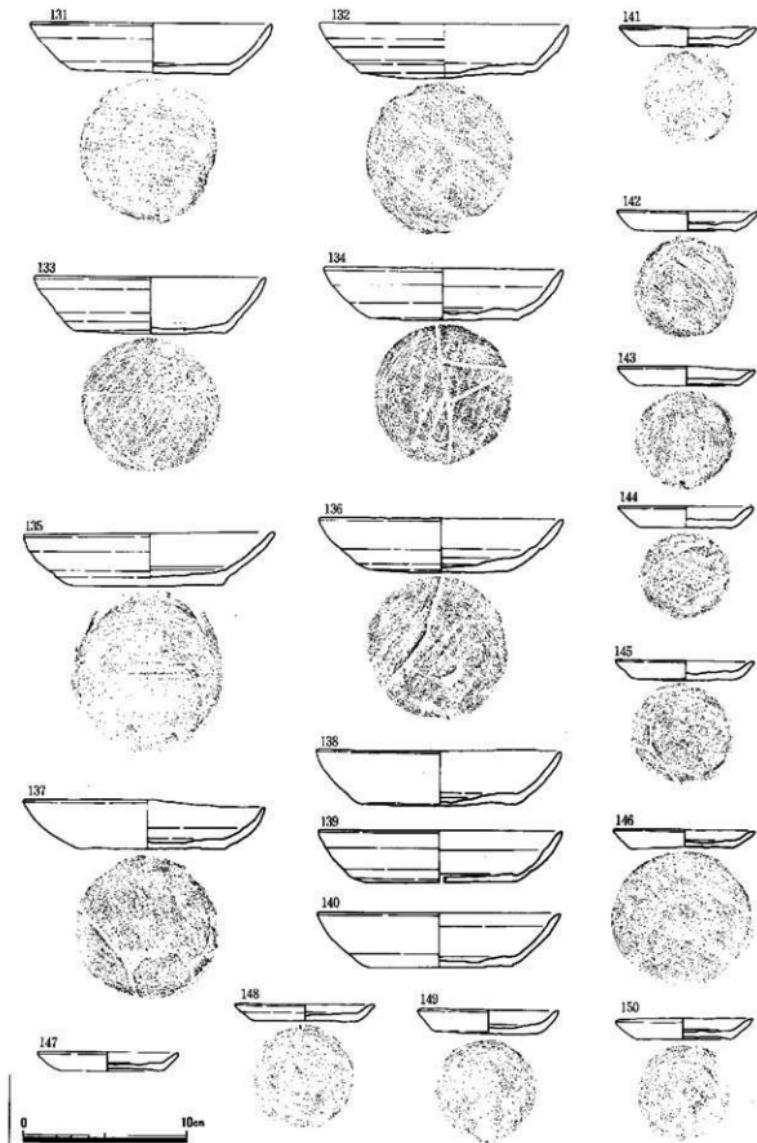
SP0149(付図)調査区の西側に位置する。SC007を切る。柱穴と思われる。径26cm、深さ43cmを測る。十師碗が出土した。出土遺物(第20図130)。130は土師碗である。復元口径15.9cmを測る。砂をわずかに含むものの胎土は精良で外面は黒褐色を呈す。調整は不明瞭であるが一部横刷毛がみられる。器壁は肉厚である。

6 時期不明の遺構と遺物

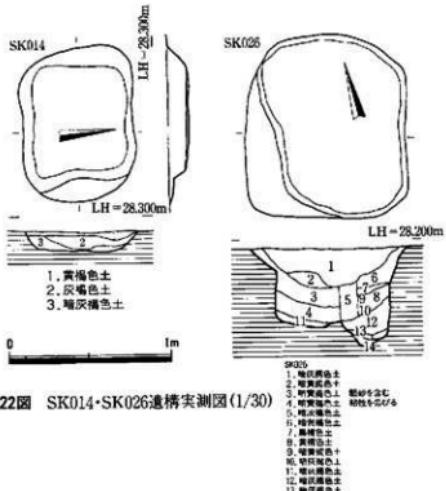
SK014(第22図)調査区中央東寄りに位置する。平面形は隅丸の方形を呈し、長径96cm、短径68cm、深さ16cmを測る。素焼きの土器片が出土しているが時期は判明しない。

SK022(付図)調査区中央南寄りに位置する。平面形は隅丸の方形を呈し、長径141cm、短径112cm、深さ21cmを測る。断面は浅皿状で覆土は灰褐色を呈す。遺物は出土していない。

SK026(第22図)調査区の西端に位置する。長径112cm、短径98cmを測る。平面形はやや逆台形を呈する。覆土は暗黄褐色を呈す。中央に径11cmの柱痕がみられ、周囲は黄色土と黒色土の互層になつている部分もあり、突き固めたものと思われる。須恵器片が出土している。



第21図 SD018出土遺物実測図(1/3)



第22図 SK014-SK026遺構実測図(1/30)

7 小結

今回の調査は重留村下遺跡群の第1次調査である。試掘調査の結果、遺跡が北東側に広がることが判明した。台地は調査区の北東側に30m延びており、そこまでは遺跡が広がるものと思われる。

本調査の結果は弥生から中世の集落が確認された。特に古墳時代の遺構は密度が濃い。

縄文時代の遺構は確認できなかつたが、遺物は鐘が竪式土器と黒曜石の剥片等が出土している。東側の包含層から多く出土するが、調査区全体の遺構からも出土しており、以前は遺構が存在したもの弥生時代以降の造成によって消失したと考えられる。弥生時代の遺構は土壙と溝を確認した。

時期は中期に限られ、調査区全体に分布する。SK011は口縁を打いた壺を逆さに伏せたり、壺を倒置したりと特異な出土状況である。SD028とつながっているSK027は覆上中に多量の白色砂を層状に含み、SD028から水の流れ込みがあったと考えられる。本調査区内で弥生時代と確認できた遺構は少なかつたが、古墳時代や中世の遺構から弥生時代中頃の土器が大量に出土し、同時期の甕棺片も出土していることから台地上に集落が存在したが、後世の造成で破壊されたと思われる。古墳時代の遺構は竪穴式住居9軒と土壙、溝を検出した。溝からは6世紀後半の土器を中心に縄文・弥生も出土している。溝は周囲の古代～中世の包含層との切り合いが不鮮明で土器が混ざってしまったことも考えられ、時期としては古代まで下る可能性もある。住居跡は方位から2時期に分けた。1期が主軸をN-110°-W前後にSC007・SC016・SC037・SC039。2期がN-70°-W前後にSC008・SC029・SC033・SC034・SC038。1・2期とも住居の切り合いがあることや土器形式に幅があることから、1回以上の建て替えの期間はあったと思われる。南側が削られていて、甕が検出できなかったSC038を除くと1・2期ともそれぞれ同じ方向に甕を持ち、規模を同じくするなど竪穴式住居の構築に関しては強い規制が働いているのがわかる。遺物ではSC008は群をぬいて出土量が多い。甕周辺から土師器の瓶や壺などが出土しており、使用していた土器をそのまま放置した感じを受ける。甕は廃棄時に祭礼を行っているが、他の住居の甕も壁から少し離れた場所に粘土塊があり、甕を破壊したような印象をうけた。遺物は須恵器の出土量が多い。他の住居でも須恵器の割合が多い他、焼け歪んだ須恵器や似非須恵土師器も出土している。当調査区東側で調査された重留窯跡と当調査区の須恵器とは時期差があるが、周辺に当時期の窯跡がある可能性も考えられる。他に水晶片や勾玉片・鉄鐵など特徴がある遺物が出土している。古代の遺構と遺物は少ない。竪穴式住居のSC015がみられるぐらいである。

中世の遺構としては粘土探掘坑と考えられるSK017やSK023がある。SD018からは土師皿・土師壺が出土した。土師皿は口縁が焦げて灯明皿として使用されたものもある。灯明皿は口縁が1箇所しか焼けていないことから、1回の使用で破棄されたと思われる。土師皿・壺は灯明皿を最初に捨て、その後土師皿・壺最後に壺を廃棄している。調査区の東側は道路や建物による削平が激しく、遺構の遺存状態は期待できないが、北側と南側では集落の広がりが確認出来る物と思われ、製鉄関連遺構の年代の確定などの点でも今後の調査が期待される。

第2章 四箇遺跡群第26次調査の記録

I はじめに

1 調査に至る経過

1995年に行われたユニバーシアード大会の競技の一つが早良区四箇田団地の南側の体育館で行われることが決まり、その会場への道路である市道四箇新村線の四箇地内道路拡張工事に伴う埋蔵文化財事前調査の依頼が早良区土木農林課から埋蔵文化財課に提出された。本調査区は第22次調査の隣接地であるため、試掘調査は行わなかった。四箇26次調査は当初、1994年8月の上旬から調査に入る予定であったが、調整の遅れ等から1994年12月15日から調査を始め、1995年1月18日に終了した。調査面積は75m²である。発掘調査においては早良区土木農林課をはじめ、早良区老人福祉センター早寿園等関係各位には多大な御理解と御協力を賜った。記して感謝の意を表したい。

2 調査の組織

調査委託 早良区土木農林課

調査主体 福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課第1係

調査総括 埋蔵文化財課長 折尾学(前) 荒巻輝勝(現) 埋蔵文化財課第1係長 横山邦繼

調査庶務 埋蔵文化財課第1係 入江善男(前) 小森彰(現)

調査担当 埋蔵文化財課第1係 屋山洋

調査作業 青木秀雄 阿比留治 池健介 岩見敏子 牛尾秋子 門部喜久美 川嶋ツキエ

金子ヨシ子 悅慶トミ子 辻節子 山尾タマエ 山口タツエ 山田ヤス子

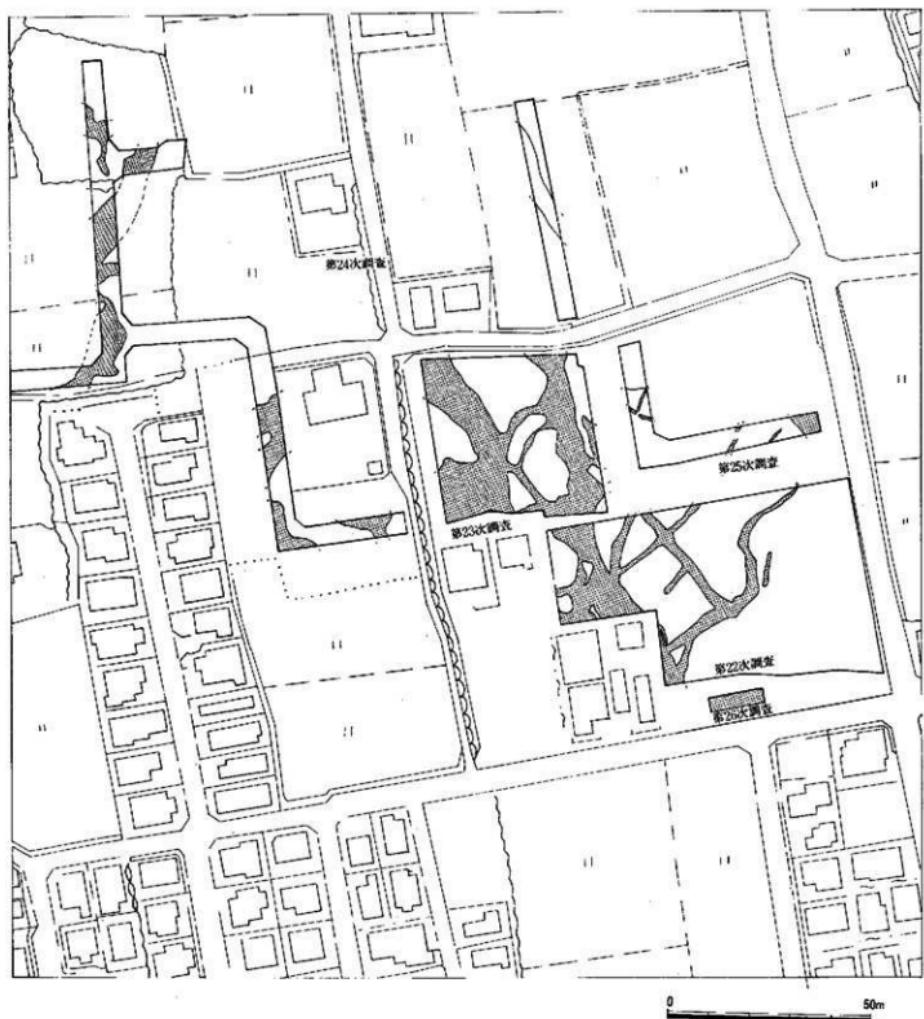
整理作業 神谷玲子 黒早津紀 濱野年代 山口初子

3 遺跡の立地と環境

四箇遺跡群は早良平野のほぼ中央の室見川中流域右岸の沖積微高地上に位置する。本遺跡群は東西800m、南北500mの規模で広がるものと思われるが、本調査地点はその中のほぼ東端に位置している。周辺で第22次・23次・24次・25次等の調査が行われており、旧河川や井堰等が検出されている。調査区は標高約22.9mを測るが、22次調査後に盛り土がされており、埋立て前の標高は21.85mである。調査区周辺の地形は調査区の東端辺りで最高所となりそれから両側に低くなっていく。調査区の東側45mに金屑川の支流が南北方向に流れている。西側はほぼ平坦に見えるが、僅かに西へ向かって低くなっている。川の東側は西側より1m程高くなっている。

4 周辺の調査

前述したように四箇遺跡群は東西800m、南北500mの範囲に広がっており、本調査区の近接地でも第22次・23次・24次・25次の調査が行われている。本調査区の北側に接する22次地点では調査区の南側で繩文時代中期の包含層と不整形土壤3基を検出しており、本調査区への広がりが予想された。その他に弥生前期末～中期初頭・古墳時代後期・古代・時期不明の河川が18条確認され、弥生時代の河川からは木製の腕輪や農具、古墳時代の河川からは建築材等が出土している。23次調査では22次調査区から北西方向に延びる弥生時代前期末の河川2条と調査区東側を北へ延びる古墳時代後期の河川1条を検



第23図 四箇道第26次調査区周辺図(1/1200)

出している。これらの河川には堤防構が設けられており、水田等の生産遺構が周辺に存在したものと思われる。河川からは縄文時代前期～古墳時代後期の遺物が出土している。24次調査では23次調査の北西に網の目の様に広がる河川から縄文晚期から弥生前期の土器や、農具などの木製品が出土している。25次調査では22次調査から北東に延びる弥生時代の河川の続きと調査区東端に南北に延びる河川を検出した。その他上面で牛等の足跡状遺構を確認した。

II 調査の記録

1 調査の概要

四箇遺跡群内の道路拡張部分は東西260mにわたるが、拡張幅が1m前後と狭い部分がほとんどで調査が困難なため、調査は1部分にとどまった。調査区は現状は早良区老人福祉センター・早寿園の駐車場と庭の一部分である。敷地内の工事面積は490m²になるが、東側では幅が1.5m以下となるため調査はできなかった。また、敷地の境界にはブロック塀があるため1m程引きをとったため調査面積は75m²となった。現状の標高は東側で22.92m、西側で22.89mを測る。老人福祉センター建設時に105cm程盛り土がなされているので、まずそれを除去した後、北側に隣接する22次調査地点における第3層まで重機で掘り下げた。調査区中心部に黄褐色粘質土のブロックが混じる部分があるため西側壁面上層で確認したところトレントン状の溝を確認した。盛り上の上が全く混じらないので老人福祉センター建設以前のものと思われる。22次調査の試掘トレントンの可能性もあると考えられる。層序は盛り土の下に第1層近現代耕作土、2層近世耕作土、3層褐色粗砂、4層暗褐色土、5層暗黃褐色土、6層黃色粘土、7層灰白色粘質土、8層砂礫層である。各層は多少の凹凸はあるもののほぼ水平を為している。

2 遺構と遺物

1) 足跡状遺構

第2層上面で検出した。調査区の東側に集中する。西側に行くにつれて分布は薄くなり中央付近で消滅する。足跡は半円形を呈する牛のものと思われる窪みと人のものとがあり、覆土は白色の粗砂である。2層上面は水田面と思われるが、畦畔等は確認できなかった。遺物は上面から土師質の土器や青磁碗・染付けの小片が出土している。

2) 土壙

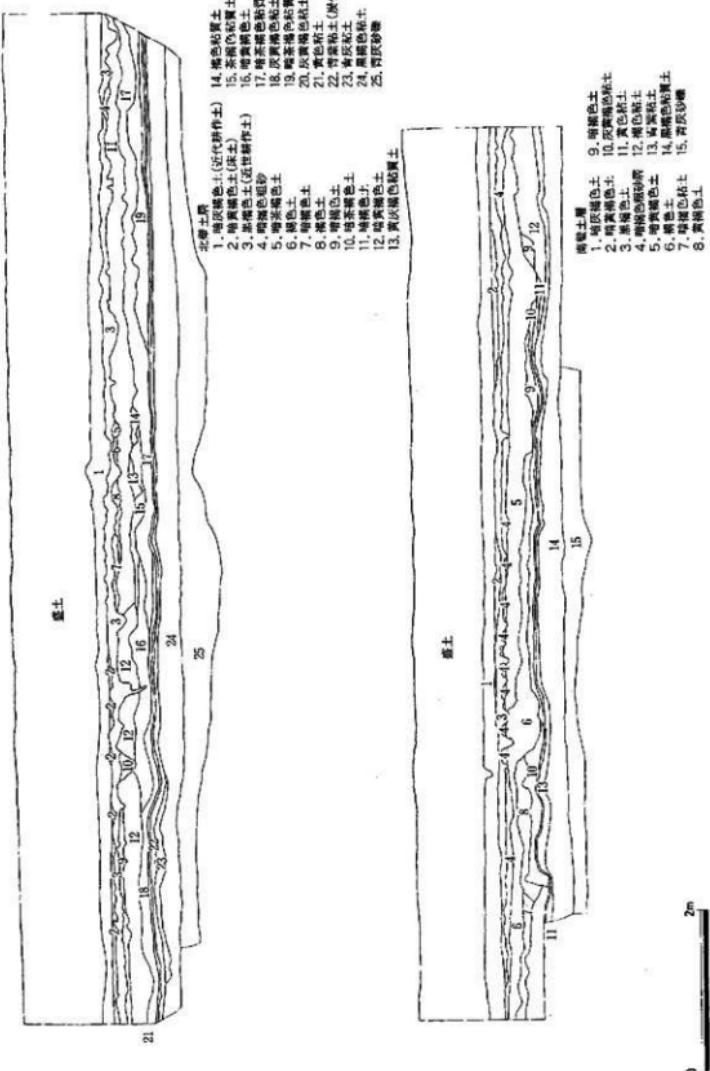
SK02(第26図) 第3層上面で検出した。長径51cm、短径39cm、深さ19cmを測り、断面は台形を呈す。覆土は褐色の粘質土である。出土遺物なし。

SK03(第26図) 第3層上面で検出した。SK02に切られており、全形は不明であるが現状で長径68cm、短径54cm、深さ7cmを測る。覆土は暗褐色土で断面は浅い皿状を呈す。出土遺物なし。

3) 包含層

第4層の暗褐色土から縄文土器数点が出土した。003は深鉢形土器の腹下半である。器壁は厚さ4.5mm～7mmを測る。器表面には多数の窪みがあり、木の尖の殻か炭化物等の圧痕ではないかと思われる。表面上部には幅約7mm程の深い沈線による渦巻形の文様が描かれている。内面は削りの様な荒々しいナデが横方向に施されている。器色は外面が黄褐色で一部煤が付着し、黒色を呈する。内面は暗黄褐色を呈する。胎土は粘土の粒は細かく、1mm以下の白色砂を僅かに含む。焼成は良好である。

第5層の暗褐色土は北接する第22次調査で縄文時代中期の深鉢や鷹島型土器が数点出土している。本調査区でもその続かが確認できた。遺物は調査区の中央より西寄りに集中している。外面に爪形の沈線を施す明確な鷹島型土器は1点のみ出土した。あとは半精製の深鉢の小片が数点出土している。004は深鉢形土器の口縁で器壁は5～7mmを測る。器表面は縄文を施した後口縁から9mm下がった所



第24圖 調査区南北土層図(1/60)

に幅約11mmの粘土帯を平行に貼り付け、粘土帯の下側を横方向にナデつけている。その後「く」の字形の爪形文を施す。また口縁内外面にも粘土を貼り付け、内面には繩文を施し、外面と上端部には連続した浅い爪形文を施している。内面の口縁から9mmまでは繩文であるが、それから下は丁寧なナデである。繩文部分とは鋭い棱をもつ。器色は内面が淡黄色で、外面は黒褐色を呈する。胎土は灰褐色を呈し、1mm以下の砂を多く含み、1~2mm程度の大きめの砂も数個含んでいる。焼成は良好である。

第6層 喙褐色粘質土 出土遺物(第26図002)。002は安山岩の剥片である。

第7層 黄色粘土黄色を呈する粘土層が調査区全体に広がっていた。厚さは最大で5cmを測る。多少の凹凸が見られる。調査区の東端では薄く1cm程度になる。炭化物を多く含む。出土遺物なし。

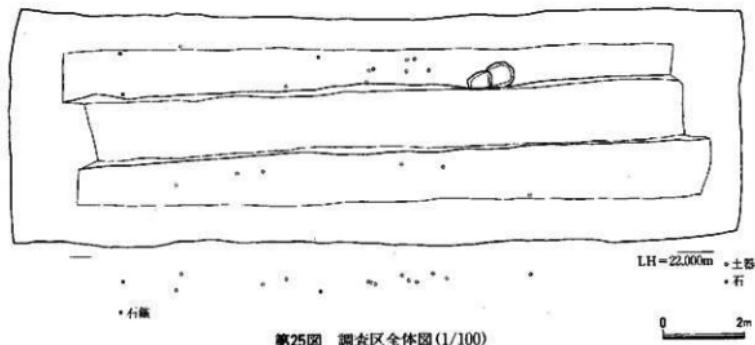
第8層 青灰色粘質土 出土遺物(第26図001)。001は黒耀石製の石鐵である。先端を欠くが現状で長さ2.4cmを測る。

第9層 青灰色を呈する握り拳大の円環を含む砂礫層である。遺物は出土していない。

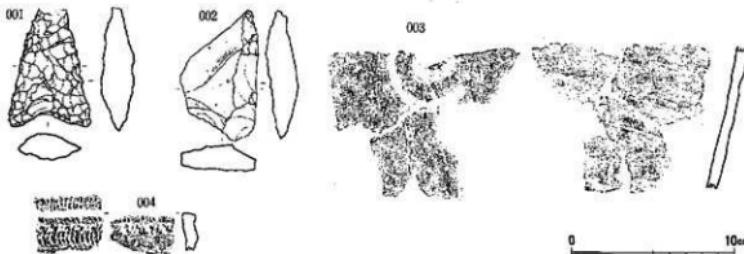
3 小結

調査面積が狭く北側に隣接する第22次調査の繩文の遺物を含む包含層の続きを確認したにとどまった。しかし、繩文中期の遺物を含む第5層の下の第8層から遺物が出土したことから周辺に前期に遡る遺構が存在する可能性が出てきた。また、第7層の黄色粘土は薄くなりながらも25次調査地点や調査区から西側に50mなど広い範囲に分布しており、今後の調査によりその形成された時期などが判明することが期待される。

黄色粘土については古環境研究所に鑑定を依頼したところ、AT火山灰とK-Ah火山灰の火山ガラスを含むことが判明した。両火山灰を含むことからK-Ah降灰以降に形成されたと考えられる。



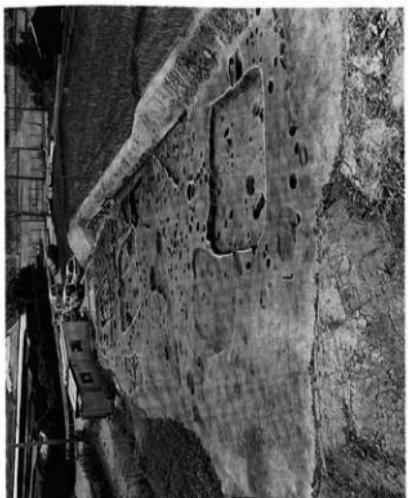
第25図 調査区全体図(1/100)



第26図 出土遺物(1/3・001は1/1)

図 版

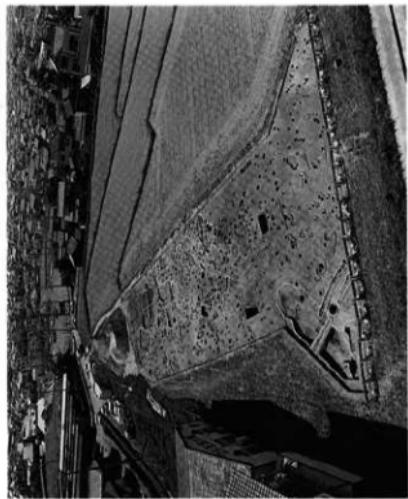
図版1 重留村下遺跡



(2)調査区 中央全景(東から)



(4)SK025(南から)



(1)調査区 東側全景(東から)



(3)調査区 西側全景(東から)

図版2 重留村下遺跡



(1)SK011(南から)



(2)SK019(西から)

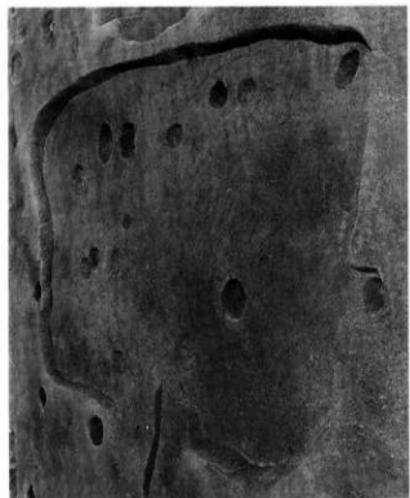


(3)SK027(西北から)

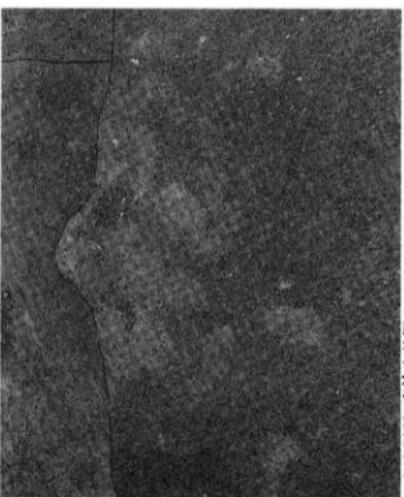
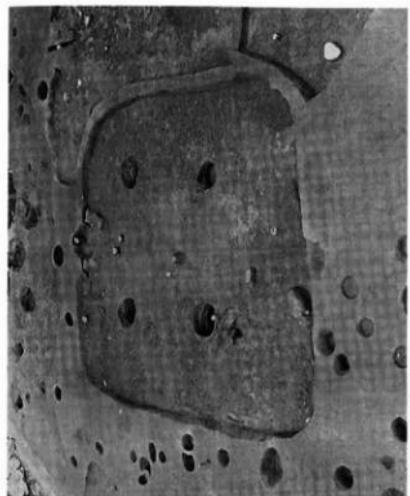


(4)SK027・SD028(西から)

図版3 重留村下遺跡



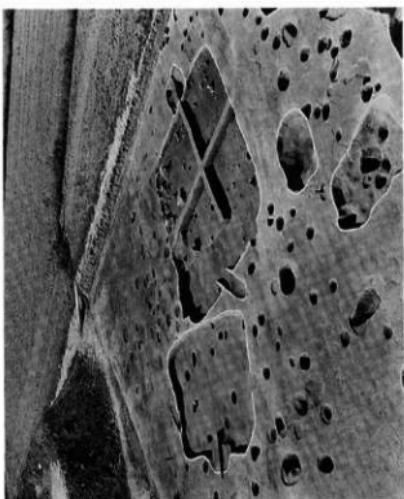
図版4 重留村下遺跡



図版5 重留村下遺跡



(2)SC033・SC034・SC037(東から)



(4)SC007・SC008(東から)



(1)SC034・SC037(東から)



(3)SC039(東から)

図版6 重留村下遺跡



(1)SC015(西から)



(2)SC038(西から)



(3)SK031(北から)



(4)SC034検出状況

図版7 重留村下遺跡



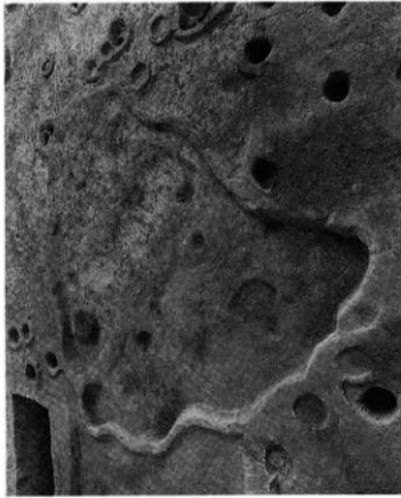
(2)SK006(南から)



(4)SK017(南から)

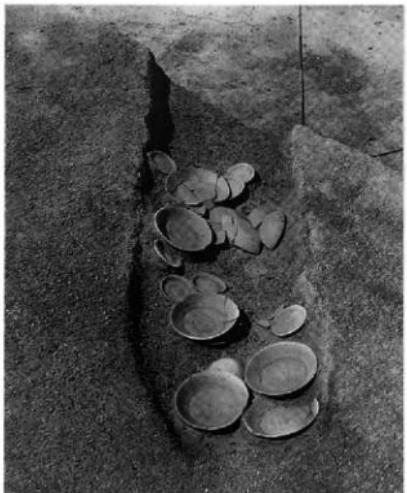


(1)SD003(西北から)

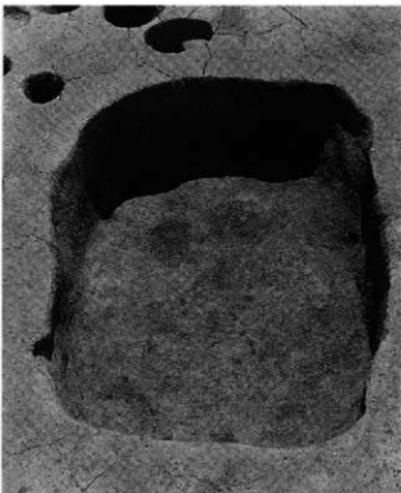


(3)SK009(北から)

図版8 重留村下遺跡



(1)SD018(南東から)



(2)SK012(西から)



(3)SK020(北東から)

图版9 四箇遺跡



(2)南側土層写真

圖版10 四箇遺跡



(1)黃色粘土寫真(西から)



(2)土器出土狀況

重留村下遺跡

-第1次調査報告-

四箇遺跡群

-第26次調査報告-

福岡市埋蔵文化財調査報告書

510集

1997年（平成9年）3月31日発行

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 大成印刷株式会社

福岡市博多区東那珂3丁目6番62号

電話 092-472-2621(代)

FAX 092-473-8241

